

五秒間ほどの青空（藤川景）

【インターネット文庫】

五秒間ほどの青空

介護する側される側

藤川 景 著

まえがき

頸髄（けいずい）損傷者は、四肢麻痺（まひ）者ともいわれるが、この言い方は不正確だと思う。なぜなら、四肢とは、両手両足のことだからである。頸髄損傷者が麻痺しているのは手足だけではない。胴体も麻痺している。程度の差こそあれ、肩から下はすべて麻痺しているのだから、全身麻痺者と称してもかまわないと思う。

麻痺とは何か。感じない、動かない、にもかかわらず、皮膚の内部にしびれと痛みだけはあるという状態である。

私は、一九八七年、三十八歳の夏に転落事故で首の骨を折り、その瞬間から全身麻痺になった。救急車で日本医科大学附属病院救命救急センター（以下、日医大）にかつぎこまれてから、防衛医科大学校病院（以下、防大）、国立身体障害者リハビリテーションセンター病院（以下、国リハ）、潤和（じゅんわ）病院、そして再び国リハと、いくつかの病院を転々として、約一年後に退院するまでの事柄を書いたのが、前作『上（うわ）の空（そら） 頸髄損傷の体と心』である。

副題の「体と心」は、いささか強引な日本語である。心身というように、心と体を並べるときは、心を優先するのが、まっとうな日本語というものである。わかっているからあえてそうした。心は一人ひとりあまりにも多様であり、そんな

不確かなことよりも、多くの頸髄損傷者に共通する特有の症状を優先して述べたほうが有益だろうと考えたからである。

退院したのが一九八八年で、その本を出したのは一九九三年。退院後の在宅生活についても書くべきだと思ったのだが、現在ただいまのことであるから、なまなましすぎてあまり書く気になれず、最終章で軽く触れるにとどめた。いろいろな意味で「死となりあわせ」といっても過言ではない日々である。

頸髄損傷は、本人の体にとって、いわば送受信の伝達路の根幹を断ち切られた真つ暗闇の停電状態である。この異様な状態になんとか体が慣れるには、五年ほどかかると思う。家族がこの状態に慣れるにも、同様の時間がかかる。大混乱するのは、本人よりむしろ家族かもしれない。家族が介護にあ

たるということは、大混乱と大混乱が衝突するということがある。うるわしい話だけではすまない。

「中途障害者は大変でしょうね」と、生まれつきの重度障害者に同情されたことがある。なるほど、たとえば生来目の見えないひとは、目が見えるというのがどういうことであるかわからないのだから、目が見えない悔しさをあじわうことはあっても、目が見えなくなった苦痛をあじわうことはないであろう。

人生の途中で全身麻痺になった者は、たいてい無気力になっていく。それは、健常者であったころの自分とくらべて、いまの自分があまりにも無力であることからくる絶望感が、主な原因である。ひとは「がんばれ、前向きになれ」と言う

が、やる気をおこそうにも、何も手がかりがない。

また、なにかをしようと思えば人手をわずらわせざるをえないということも、障害者を無気力にしていくひとつの原因である。気兼ね、遠慮、ものおじは、障害者のかかえるもう一つの障害といえるだろう。

かといって、その内なる障害を克服すればしたで、今度は、自己中心的だの図々しいだのという声が聞こえてくる。

気兼ねを最小限にして、なおかつ何事かをおこなおうとすれば、道具の工夫は必須である。てだてがなければ、すべて雲をつかむような話で終わってしまう。そこで本書では、全身麻痺の私が在宅生活をより快適なものにするためおこなったさまざまな工夫を中心に述べることにした。

ひとくちに頸髄損傷者といっても、その残存能力や症状は各人各様である。心のありかた、家庭環境となればなおさら異なる。それでもなお私的な生活の状態や道具の工夫について書こうと思ったのは、多くの頸髄損傷者を知るに及んで、みんなが困っていることにそれほど大きな差はない、むしろ共通するもののほうが多いという確信を得たからである。

健全者にとっても無縁な内容ではないと思う。ひとはいつ重度障害者になるかわからないし、年老いれば必ずなんらかの障害を負うことになる。目は見えん、耳は聞こえん、足腰たたんというふうに。

全身麻痺という極端な個別性の中に、なにかしら普遍的なものを見いだしたいという志をいだきながら筆を進めた。いや、レーザー光線を走らせた。

目次

まえがき／二

苛酷な現実

アブチャン

何十人もの障害者が集まる食堂の光景は、なれてしまえばどうということもないが、最初は異様に感じられた。キーワード「痙攣、セルシン、起立性低血圧など」

不健康な骨

退院後も関節の硬縮予防運動は欠かせないのだが、家人の手はとてもそこまで回らない。PTが来てくれることになった。尿路感染、体位交換、硬縮予防、肩胛骨など

前のめりの日々／一二（**ホームページに掲載**）

もし悪魔というものがいて、そいつが寝返りの自由を保障してくれるなら、私はいつでも取引きに応じる用意がある。お立ち台、三角筋、背起こし、円座、痛み対策など

肉体という名の独房

頸髄損傷者は肉体という名の独房に終身とじこめられた囚人なのだと思う。こんな体で生きながらえることに意味があるのか。ハンディキャブ、安楽死、自己決定権など

五秒間の青空／四一（ホームページに掲載）

突然はげしい頭痛におそわれ緊急入院。病身の妻ががんばって看護してくれるのだが入院先でもひと騒動。妻はおびえていた。バルーン交換、完全看護、トランスファーなど

ヒマワリの種を買いに／一〇四（ホームページに掲載）

疲れきった妻は呪詛と自虐をくりかえす。逃げるように寒空のもと外出した私は、ひとりの男の子と出会う。夫婦関係、バードウオッチング、外出、身支度、危険など

意志の実現

選挙権を回復せよ／一三六（ホームページに掲載）

投票所に行かなければ投票できないと思っていたが、郵便投票という手があることを知る。ところが両上肢の使えない者はダ

メダという。選挙管理委員会、公職選挙法など

究極のページめくりノ一七四（ホームページに掲載）

誰に気兼ねすることなく思う存分本を読みたい。さまざまな方法を試した末にたどりついたのはごく単純な方法だった。マウスティック、スティック置きなど

筆ペンも、パソコンも

『上の空』を読んだ国リハ研究所の部長から手を使わないパソコンを紹介された。いまや必需品。音で動く録音機、電動書見台、医療裁判、電子化図書、光キーボードなど

まがるストローはしやらくさいか

まがるストローはそもそも医療用具だった。障害者にとって便利なものは、健常者にとってはもつと便利なので普及した。蛇腹、ルーズソックス、鼻毛切りなど

インテルサットめざまし

全身麻痺者にとつてもつとも恐ろしいのは連絡の遮断。2階で眠りこんでいる子供を起こすにはどうしたらいいか。気管切開、意思伝達、シルバーホン、環境制御装置など

あとがき

（目次おわり）

五秒間ほどの青空（藤川景）

苛
酷
な
現
実

前のめりの日々

競走馬は、足の骨を折って回復不能と診断されるやいなや、薬殺されてしまう。競馬ファンならずとも周知の事実だが、理由を知らない者にとってはむごい仕打ちのようにも見える。足一本折ったぐらいで、役立たずになったからといって殺すのかと。

だが実情はすこし異なるようだ。なおる程度の骨折なら、しばらくしてまた競馬に復帰するし、競馬ほどの激務に耐えられないものは、乗馬用にまわされるそうだ。

問題は、ポツキリ折って回復不能なものである。ふだんは眠るときですら立ったままのウマも、そうなってしまったのは横にならざるをえない。寝そべると、ことさらにつすいサラブレッドの皮膚は、またたくまに破れてしまう。褥瘡（じょくそう）である。患部から菌がはいつて、敗血症になり、おそかれはやかれ死に至る。それで、馬の苦痛を減じるために、麻酔薬をつかって安楽死させるのだという。

競馬ファンの、「かわいそうだから助けてあげて」という助命嘆願が功を奏し、手術がほどこされたとしても、五百キロからの体重はほかの足をもこわしてしまい、身動きができなくなる。運動不足もまた、ウマにとっては命取りなのだ。そうだ。

そこへいくとライオンはつらやましい。一日中寝そべって

いるにもかかわらず、運動不足にもならなければ、褥瘡にもならない。それだけでなく、いつもごろごろ寝てばかりいるのに、いざとなるとスツクと立っていきなり走りだせるといのが、これがまたうらやましい。私など、急に上半身を起こされたら、脳貧血で失神しかねない。

心臓にとっていちばん楽なのは、体が横たわっている状態である。立っていると、体のすみずみまで血液を送り込むのがたいへんらしい。とくに心臓より上の脳に血液を運ぶことが、難事業のようだ。寝てばかりいると、心臓はいまのはたらきでいいものだと思いこみ、力が落ちてしまうのである。

寝たきり人間が起立性低血圧を克服するには、なるべく長い時間、体を立てているよう心がけるしかない。訓練は、ベッド上で上半身を起こすことから始め、ついで車椅子にのる

ことによって足を下にさげ、最終的には「お立ち台」にあがるといのが、リハビリ病院のとり手順である。

お立ち台は、過激なものだ。入院中、幾度かこれにのったことがある。児童遊園地のシーソーのような形で、人の背丈ほどの長さ。水平にしたシーソーの上に抱えられてトランスファーし、体が落ちないようにベルトで固定する。スイッチをいれるとシーソーの頭部があがり、脚部がさがる仕組みになっている。

「苦しくなったら声をかけてください」

担当のPTは、そう言いのこしてほかの患者のところへ行ってしまう。患者数に比べ、PTの数が少ないから、一人の患者にかかりきりになっている暇はない（PT訓練の保険点数は、時間の長短に関わりなく一回いくらできまっている

そうだ。関係ないけど。

十五度あげた程度で、はやくもすこし息苦しくなってくる。三十度にかたむけると、頭から血の気が引いていく。四十五度あげた日には、目の前の風景がひび割れだらけになって、もはや失神寸前である。PTに呼びかけても、室内はざわつき、こちらの声も小さいときているから、聞こえやしない。

脳貧血になりやすいことが分かっている患者には、体を起こす前に足首から太股にかけてゲートルのように包帯を巻いておく。これはかなり効果があった。いままでならとてもあげられない角度まであげることができた。人間の体は、血の袋のようなものなのだろうか。

ベッドの背起こしをあげるのは、はた目で見ると

苦しいことだ。ひとそれぞれ置かれた条件が異なるから、念のため現在の私のベッドについて記しておく、電動ベッドで、付属のマットの上にエアマットがのっており、尻のあたりに平らな紙おむつ、背中あたりに大きいバスタオルが敷いてある。ベッドは、背起こしのみ可能。膝はあがらない。

上半身を起こしていくにしたがって、ただでさえ痛む背中が、ますます痛くなっていく。腹筋がきけば話はまた別だろうが、胸から下の筋力すべてを失っている私にとって、ベッドを起こすということは、うつろから背中を押すというに等しい動きなのである。起こせば起こすほど圧迫が強くなる。足首を直角にたもつため、ベッドの足板（というのだろうか）と足の裏とのあいだにクッションや座布団を詰めてある。だから頭が上方にスライドしていかないかぎり、体を起こせば

起こすほど、背中がひきつれるのである。

さらに無理をしてあげると、逃げ場のなくなった圧力は、カクンと膝をもちあげて逃げ、その刺激で反射的な痙攣（けいれん）が起きて体がバツタンバツタン波をうち、ズルツと尻がさがる。これがまた困るんだ。ベッドをおろしてみると、体が下方に移動してしまっていて、頭は枕から半分ずり落ちている。いごこちがわるいといったらない。一度さがってしまった体は、自力ではもちろん他力でも容易にはあがらない。ベッド上にいるときのいちばんの問題は、痛みである。背中が痛い。地獄のように痛い（もし悪魔というものがいて、そいつが寝返りの自由を保障してくれるなら、私はいつでも取引に応じる用意がある）。

触覚が残っているのは、肩胛骨のあたりまでだから、そこ

をすぎてしまえば痛いということもない。いちばん重みの加わっているのは尻のはずだが、尻にはなんの痛痒もない。ただし、痛みがないというのは危険なことでもあり、寝たきりになってまず褥瘡ができるのは、尻の仙骨部なのである。

私のようなC5クラスは、三角筋がわずかにきくので、あくびをすると腕が体側から離れてしまう。もっとも、決して頭上に手をあげて、「ウーン」と伸びをする快感にはとどかない。腕はせいぜい肩の位置まで、すなわち水平にあがるにすぎない。C4のひとは、三角筋も動かせないようだから、C5はそれよりましかというところ、必ずしもそうとは言えない。あくびをしたあと、左右に広がってしまった肘を自力で元にもどせないからである。ベッドの外へたれさがってしまった手の重みが、腕のつけねや上腕二頭筋にかかってくる。

あくびが出そうなとき腕が動かないように我慢していると、あるいは布団の重みで腕が動かせないばあいなど、負担が肩に集中して、肩の筋肉がつることもある。つたとしても手でもむことができない。「ウーククク」とうなりながら、あくびの涙と痛みの涙をながすのみである。

ベッドに寝ていたいなんて、これっぽっちも思わない。横になっていたのでは、なにかと不自由なのである。テレビも見にくいし、食事もしにくい。パソコンもむつかしければ、読書はもっとむつかしい。第一、頭が枕にくっついているのがうっとうしい。頭にかいた汗は、かゆみのもとだ。頭はいつも空冷式にひやしておきたい。でないと、脳味噌がぬくくなってしまう。

起立性低血圧克服のためでなくても、ベッドになんかいた

くはない。寝ていること自体がいらだたしい。いまいまいしいのである。

電動車椅子に乗ると、精神的には楽になる。ひとに押ししてもらつ介助用車椅子は、自分の思いどおりのほうに向けないから、つまらない。退院後まもないころは、外出するときには介助用車椅子ときめていた。妻が押していくのである。家族で近所のコンビニへ行つたおり、店内で、「ちよつと待つてね」と、通行のじゃまにならないところに置いておかれた。わずか四、五分のことだったが、ポテトチップスの山ばかりを見つづけるのは、じつにうんざりすることだった。

しかしだ。車椅子に乗ればたしかに行動範囲はひろがるものの、息が苦しくなる。失神その他の危険が増すうえに、背中と腕の痛みはあいかわらずなのである。

なんとか痛みを軽減する方法を考え出さねばならない。

まずベッドである。

私のつかっているエアマットには、失禁予防シートが付いていた。自転車の雨よけにつかうような頑丈な材質で、エアマット全体をおおうものである。せつかくの除圧機能をこれでは減殺（げんさい）してしまうのではないか。いくらひどい失禁をしても、まさか足や背中までよごれることはあるまい。そう考えた私は、この失禁予防シートをとりのけた。そのかわり、腰のあたりに通気性のあるビニール様のふるしきを敷いた。無論その上にふつつの縦シートと横シートをかけるのである。これで肩胛骨の当たりかたがすこしやわらかくなった。

つぎに車椅子。

私の車椅子は、リクライニングできるように背もたれが頭の高さまである。この型式をハイバックとよぶなら、ふつうの車椅子はロウバックとっていいのだろうか。このロウバックがうらやましくてならない。ロウバックなら、背中が当たって痛むということはないはずだ。

背もたれが上半分とりはずせる構造になっている点に目をつけ、ためしにはずしてみた。そのとたん上半身が、うしろへひっくりかえった。そうなるはずだと思ってはいた。頸髄を損傷すると、腹筋も背筋もきかなくなると本には書いてある。しかし現実には、ロウバックの車椅子をつかっている頸損も多いのである。C5、C6といっても、その髄節で中枢神経が完全に切れるとは限らず、腹筋などを支配する神経

が生きのこるためらしい。

ちなみに、「症状固定は一年半」といって、体の機能回復は事故後一年半ほどで終わるといっのが医療上の常識なのだ。数年後に回復する筋肉もなかにはある。神経を圧迫していたなにかがなくなって神経のはたらきが回復したり、べつの筋肉が擬似的な動きをはじめるといっようなことがあるらしく、まことに人体は玄妙なものである。はやばやとあきらめてはいけないということだ。

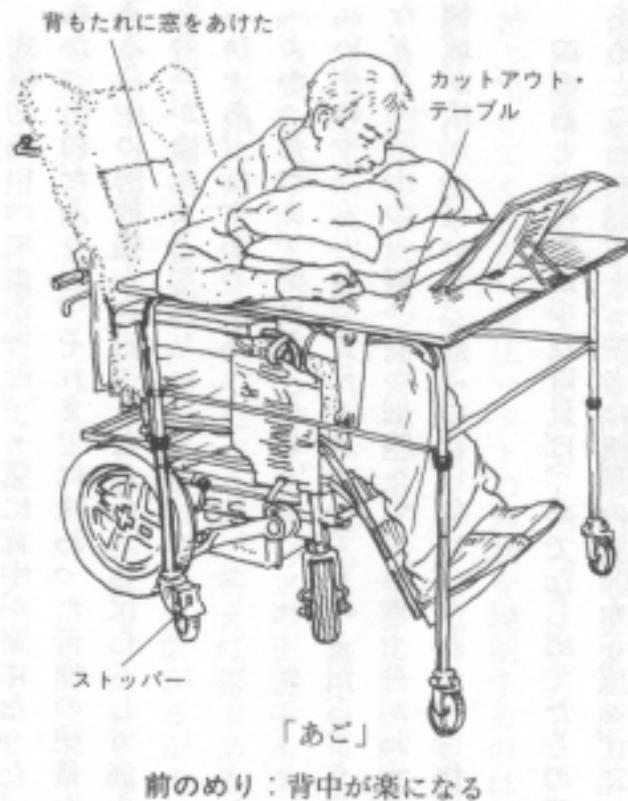
しかし、私のばあいはそんなふうだった。背もたれの低い車椅子はつかえないものと覚悟をきめた。そこで、背もたれの肩胛骨に当たる部分をくりぬいてみてはどうかと考えた。車椅子屋にたのんで、窓をあけてもらった。背もたれをおおっているムートンも、おなじ場所をくりぬいた。

やや楽になった。突き刺すような痛みはなくなった。だがやはり背中の上部に対する圧痛はのこった。

前のめりの発見、これが私の生活を変えた。

痛みの種類は、圧痛である。しびれの昂じた「しびれ痛」もまじってはいるが、大半は圧痛なのだから、圧を取り除けばいい。除圧すればいい。そういう思考経路から行きついた体勢であった。

入院中にカットアウト・テーブルを注文してつくっておいた。ふつつのテーブルでは車椅子の肘かけがつかえて、体をテーブルに付けられないが、これは高さがあるうえに天板の一端がえぐってあるので中まではいりこめる。入院中の計画では、これにスプリング・ balanser をとりつけて腕をつらし、自力で食事をしたり腕の運動をしたりする予定だった。



新聞の見開
きをひとり
で読めるよ
うな仕掛け
にもしてお
いた。しかし、
家に帰って
みるととて

もそんな余裕はなく、部屋のかたすみで物置きがわりになっ
ていた。今度はこれに目をつけた。手近にあるものを利用す
るのが、生活改善のコツである。電子機器の利用をハイテク
というなら、こちらはロウテクともいっべきものである。
背中全体を除圧するには、前によりかかるしかない。カッ

トアウト・テーブルの上に、これまた使われずに無用の長物と化していたフローテーション・マットを二枚かさね、さらにクッションや枕などを積みあげ、前傾姿勢をとったとき、ちょうどあごが枕の上になるようにした。

大成功といってよかった。一気に背中が楽になった。どうしてこれをもつとはやく思いつかなかったのだろうか、それまでに味わった苦痛の総量を悔やんだ。前のめりをした瞬間におぼえる背中解放感もさることながら、しばらくして痛みが遠のいたあとに聞こえてくる細胞たちの声がまたよるこばしい。

「ひゃあ、たすかったあ」

「よかったねえ、楽になったね」

「いやはやなんとも。これでさすっってもらえたら言っこと

はない」

などと、背中の一個一個の細胞たちがささやきかわすのである。チリチリと背中全体に安堵の領域が広がっていく。痛みのない体は、それだけで快樂である。

このあとの行数が少なければ、めでたしめでたしの成功譚だと見当がつくが、まだずいぶんあるところを見ると、読者は波瀾の展開を予感せずにはいられないであろう。

枕の上に置いたタオルにポチポチと茶色の点を発見したのは、前のめりを始めて数日後のことである。よく見ると、血痕だった。あごがこすれて血が出たのである。上半身の重みの何分の一かが、あごの先端にかかるのだらう。人は頭だ

けでも十キロある。

あごをまっすぐのせずに首をかしげ、ちようつがいのほうで力を受けるようにすると同時に、以来、あごのせの素材さがしが始まった。

これこれこつこつわけで出血したと訪問看護婦にうったえたら、その場で脱脂綿と包帯をつかってドーナツ形の小さな円座をつくってくれた。しかし、円座というのはいつでもそうなのだが、患部は除圧できても円座の当たる部分に圧力が加わる。

円座はダメでしたと報告すると、つぎにウレタンフォームの「無圧マット」の切れはしを持ってきてくれた。無圧マットの形状を説明するのはむづかしい。華道でつかう剣山、あれの針をうんと短くして全体を百倍ぐらいに拡大した形と

でもいったらいいだろうか。

もし剣山の上に立ったとしても、足の裏に針が刺さることはない。なぜなら重みはたくさんの点で支えられ、分散されるからである。無圧マットもその原理であるという。「点で支えるから安心です」と、むかしジャイアントの王選手もテレビCMで言っていた。しかし無圧マットは本当に点で支えるものだろうか。答えは否である。顔が無圧マットの中に沈み、鼻がふさがれた。剣山は金属製だから足をのせても針がまがることはないが、ウレタンフォームはやわらかいから物をのせればすぐさまつぶれる。たいらなマットとなにも変わらない。テンで支えやしないのである。

妻が子供用の浮輪を買ってきた。エアマットにヒントを得たようだ。さっそくふくらませてあぐの下に置いてみた。肌

ざわりが悪いのでガーゼをかぶせる。輪っかの外側からあごをのせると浮輪がじゃまして前が見えないし、かぶるように内側からのせると、なんだかアメリカ映画のタイトルバックに出てくるライオンのようだ。それに素材のビニールがくさくて閉口した。浮輪のおいをわざわざかぐひとはいないから、浮輪会社もそこまで配慮しないのだろう。

結局、そばから枕の上にムートンを敷き、さらにたたんだガーゼをのせることにした。これであごが沈みすぎて鼻がぶさがることなく、かつ適度な弾力を得ることができた。ようやく前のめりのスタイルが完成した。

前のめりの時間ほど安楽なものはない。顔の前に書見台を置き、そこに本や雑誌、新聞などを立てかけて読むこと

もできれば、前方のテレビを見ることもできるのである。

だが。このスタイルの内包していた問題点が、しだいにあらわになってきた。あごの先端に力が集中しないようになるべく顔をねじまげていたところ、あごの調子が悪くなってきた。口をひらくたびに、あごのちようつがいが引つかかってカクカクいう。ときには口が全部ひらかないこともある。顎（がく）関節症である。奥歯が痛くなり、修理した歯のかぶせものが頻繁にはずれるようになった。歯に口中の粘膜が押しつけられて、口内炎ができやすくなった。

歯科医に相談してみたが、どうやらそんな症例にはお目にかかったことがないらしく、マスクの下でもごもご言うばかりで、さっぱり要領を得ない。内科医に話したときには、歯よりむしろ頸椎に負担がかかりすぎるほづが心配だと言わ

れ、それもそうだと思い、だからといって解決策があるわけではないから、ますます憂鬱（ゆううつ）になった。PTに聞くと、十分から十五分なら問題ないだろうと言う。一時間はしないと背中が楽にならないというのに。

あごで体重を支えるところからさまざま支障をきたすのである。支点を胸とひたいにかえてみた。胸とテーブルのあいだにクッションをはさみ、枕をすこし前方におしやり、あごでなくひたいをのせる。かくしてあごにはなんの負担もかからなくなった。この方式を「おでこ」とよぶことにした。

だが、おでこにしても、重みのくわわる場所が変わるだけなのである。今度はひたいと眼球が圧迫されることになった。前のめりしている最中になにも見えないのはもちろん、体をおこしてもしばらくは目の焦点がさだまらない。



視力の問題は、切実である。いまの私にとって、視力は危険から身をまもるための最大の武器であるとすらいえる。めがねをかけたりはずしたりかけかえたりしているひとを見るたび、自由にそれができるならまだいいだ

ろつが、もし自分がそんなことになったらどうしようと思う。「あゝ」「でなく」「おでこ」で、なおかつ目にさわらないもの……。テレビでなにげなくアメリカンフットボールを見ていたとき、「そうだ、このヘルメットだ」と思いついた。これをかぶって前のめりすれば、重みは顔全体に分散され、目は眼前の格子で保護されるではないか。われながら名案と感心、思いついたら矢も盾もたまらない。初対面のボランティ

アに、なんとか試すつてはないものだろうかと相談してみた。

「うちの大学はスポーツはみんな弱いんですけど、アメリカンフットボールだけは強いんです。心あたりがあるから、あたってみます」

と上智大生の返事はたのもしかった。

一週間後、新品のヘルメットを持ってあらわれたのには、すこし意外な気がした。てっきり使いふるしを借りてきてくれるものかと思いきや、こんでいたのである。アメフト部の友人に話したところ、貸すのはかまわないけど一度つかったヘルメットなんか汗くさくてかぶれたものではないよと言われたので、専門店へ行って事情を説明し、新品を借りてきたのと。人情いまだ地におちずである。

ところが。かぶってみておどろいた。いや、痛いのも

たいの。ヘルメットと頭のあいだにクッションがはいっているのだが、これが猛烈にこめかみをしめつけるのである。ゆるくては用をなさないのだろう。重さも二、三キロあるのではないか。こんなものをかぶったうえに鎧（よろい）を着込んで走るなんて、常人の技ではない。

それでもなんとか使えないものかと一日、二日ためしてみたが、せつかくの好意も無駄にせざるを得なかった。

つぎに着目したのは、野球のキャッチャーマスクである。これもまた、テレビのプロ野球をボーツとながめていたときにひらめいた。アメラグのヘルメットが重いのは、頭全体をおおっているからだろう。私に必要なのは、前面だけである。キャッチャーマスクの重さなどたいしたことはない。衝撃をひたいとあごに分散して受けとめるといふ構造も、うつつ



けである。

キャッチャーマスクの構造は、だれでも知っているだろうが、しげしげとながめたことのあるひとは少ないだろう。鉄格子の顔面側の上下に括弧のかたち（ ）

をしたクッションがとりつけられている。クッションにはジッパーがあり、あけてみると中にはスポンジがつめてある。

ためしてみたところ、あごに当たりすぎる。あごの部分のスポンジをすこし抜き取って、なるべく頬骨で重みを受けとめるよう工夫した。まずまずといったところか。眼球はたしかに保護されるが、顔と体の傾斜角がむづかしい。

結局いまのところは不本意ながらほとんど「おでこ」で前のめりをしている。

前のめりという体位の発見で、乗車時間は飛躍的に延長した。痛みの量も半減したといっているだろう。しかし、前のめりをして痛みがうすらぎ、心にゆとりができると、ああ、こんな無為の時間をすごしているいいものだろうか、痛み対策を第一義とするような生活にどれほどの意味があるのだろうかというあせりもまた生じるのである。人生の残り時間が少ない。

読まれたくて順番待ちしている本たちも、列をなしているというのに……。役所から来た書類もたまっている。原稿もはやく書かないとなあ……。パソコンに向かえる時間は限ら

れているのだ。でも、体を起こしたらまた背中が痛むだろうし……。痛みは氣力を萎えさせる。ウーン、どうしたものか……。もうすこしこのままでいるか。でもなあ、おでこも痛くなってきたし、枕もだいぶくずれてきたし、息も苦しくなってきたから……。

ふさがれた瞼（まぶた）のうらの暗闇の中に緑や黄色の模様が浮かんでは消え、消えてはまた浮かぶ。その消長を見ながら思うのである。前にも後ろにも、どこにも寄りかからずにすわっていられたら、どんなに楽だろう。畳の上にあぐらをかいてすわれるなら、腕の一本ぐらいくれてやってもいい。体重があるかぎり、いかなる手段を講じても自分にはもはや楽な姿勢というものはあり得ない。

ウマは、横になると二時間で神経麻痺を起こすそうだ。エ

アマツトをつかっても四時間が限度だという。体重のあまりにも多きがゆえである。一生を立ちっぱなしで暮らすウマの習性も極端だが、人間もまた横になっただままで生きてゆくようには造られていない。動くようにできている生物を動物というなら、私はいったい何ものなのだろう。

五秒間の青空

一九九四年一月二十二日（土）夕刻、K総合病院内科に救急車で入院。二十九日（土）都立M病院脳外科に救急車で転院。二月四日（金）午後、寝台車で退院。

K総合病院に光子姉さん、訪問看護婦の小島さん、ボランティアの本條さん、来山（きたやま）くん、鈴木さん、M病院に三五館の松本さんの見舞いをうつける。

二十二日の記憶がはなはだ曖昧。翌日、意識が回復してか

らも、ただ自分が病院にいるのだなあと認識するだけで、茫然としており、在院の理由に疑問をいなくことすらなかった。八七年に首の骨を折って日医大のICU（集中治療室）にかつきこまれたときも、おそらくこんな意識状態だったのだろう。受傷以来失神は日常茶飯事だが、人事不省ともいうべき状態におちいったのは、これがはじめてである。

のちに妻やホーム・ヘルパーの橘さんから聞いた話で事態の概略を再現すると。

朝九時出勤してきた橘さんに食事をとらせてもらった。妻はいつものように金曜から休養のため実家へとまわりに行っていて留守。

十時、福祉公社の協力員小池さん来宅。

いつもなら歯みがき、ひげそりがすむと、車椅子にうつつ

てカットアウト・テーブルに前のめりをして背中を除圧をするのに、その日は背中痛みをこらえながら体を起こしたまま、東京都神経科学総合研究所の松井さんから依頼されていた「はがき通信」（四肢マヒ者の情報交換誌）のレイアウト改良案を小池さんあいてに口述筆記していたのである。

前日は午前中、訪問看護で排便・膀胱（ぼうこう）洗浄・入浴・ガーゼ交換などの処置、午後一時半から福祉事務所のヘルパーと書類整理、そのあと三五館の星山さん、松本さんと次作（本書）の打ちあわせという強行スケジュール。打ちあわせにそなえて企画案も練っておかなければならなかった。

つまり二つの重要案件を同時にすすめていたわけで、これからくる疲労が今回の入院さわぎの遠因だろう。

容態急変のきっかけは、当日の「バルーン交換」と思われる。十二時半ベッドにもどって昼食（ここからのことは、あらためて聞かされてもまったく思いだせない）。二時半、泌尿器科のT先生往診。バルーン交換の日であった。膀胱洗浄とバルーン交換が終わって先生がおかえりになったあとで急にはげしい頭痛におそわれた。

冒頭から矢つぎ早にさまざまなひとが出てきて、わかりにくいだろう。若干の説明を加えておきたい。

わが家にはこの当時、常時六つの機関から手助けに来てもらっていた。現在もほとんど変わらない。

ホーム・ヘルパーは、民間の看護婦・家政婦紹介所から派遣されてくるひとで、一日八時間ほぼ毎日来てもらう。家事中心だが、介護もおねがいする。支援体制の中核である。以前は家政婦と呼ばれていたが、在宅高齢者の急増にともない、マンパワーの充実をはかるため、一定期間の経験と研修を経たひとに与えられるようになった資格名である。

福祉事務所は区役所の一部門。そのヘルパーは、だから区の職員である。全員女性。

有償ボランティアは、わが区の場合二機関あり、一九九一年に設立された福祉公社は、半官半民の財団法人。もう一つは三十年ほど前にできたボランティア団体で歴史が古く、現在は社団法人になっている。共に協力員は一般家庭の主婦が多い。

ボランティア・センターは、社会福祉協議会という民間団体の一部門で、そこで紹介してくれるのは、無償ボランティア。わが家のばあいは全員男性である。

訪問看護はわが区の医師会の事業。窓口は区役所であり、活動主体はやはり子育てのため一旦現場をはなれていた看護婦である。訪問看護制度は、看護婦の訪問だけでなく、主治医の定期的な往診も受けられる、じつにありがたい制度である。

さらに、ここでバルーン交換についても説明しておかないと話がわかりにくいだろう。私は尿意もなければ自力排尿することもできないので、恥骨のすこし上に穴をあけて膀胱にカテーテルをさしこむ膀胱瘻（ぼうこうろう）という方法で

排尿している。バルーン・カテーテルは細い管だから、内側に尿のなかの石灰分などがたまって、内径がせまくなるおそれがある。血管にコレステロールがたまるようなものだろうか。そこで、三週間に一度新しいものに換えるわけだ。

いまは専門医が往診してくれるようになったのでずいぶん楽だが、退院して在宅障害者になりたてのころは、妻が介助用の車椅子を押して近くの病院へ通っていた。車椅子は道路交通法のうえでは歩行者あつかいになっている。しかし、日本には車椅子がとおれるような歩道などありはしない。バスやトラックにつしるから警笛でおいたてられながら車道を行き、やっと病院の前までたどりついたかと思うと、今度はいわゆる段差というやつがいくえにも立ちほだかっている。

雨のなかを車椅子ででかけるのは無理なことなのだが、たまたまバルーン交換の日に雨がふり、その日をのがすとつぎに病院へ行ける日が大幅にずれこんでしまうので、なんとかでも行かなければならないということがあった。私は防水のフードつきジャンパーをすっぽり着こみ下半身には水をはじく毛布をかけ、妻が車椅子を押して、小学生の子供ふたりが傘をさしかけ、雨のなかを強行突破した。帰りも無論おなじ状況である。

私は妻がいつ爆発するかとハラハラしていた。程度の差こそあれ日々そのような心労と疲労を積みかさねていくうちに、妻の状態はどんどん悪くなっていったのである。

車道を通行中うしろから警笛を鳴らした自動車の運転手にくっついてかかることもしばしばである。運転手は、じゃまだ

からもつと道路のはじを行けという。ところが道路というものは、自分も障害者になってはじめて気づいたことなのだが、排水のため両はじがさがった、極端に言えばかまぼこ型の断面をえがくようなかたちにつくられている。健常者にとってはわずかな傾斜だから、どつとということもない、しらずしらずのうちに全身の筋肉をつかって微妙なバランスをとっているのである。

だが車椅子にとってはこのわずかな傾斜も大敵で、道路のはじを行ったら最後、みるみるうちに車椅子はかたむき、乗っている私もかたむき、そして私には態勢をたてなおす筋力がないから、もがけばもがくほどますます体がかたむいてゆく。妻は私の体を起こしながら同時に車椅子の態勢もたてなおさなければならぬ。ちなみに私、身長は百八十センチあ

る。

背後で妻と運転手が怒鳴りあっている。渋滞した車がクラクションを鳴らし、通行人はなにごとならんと立ちどまっとながめる。私は前を向いたつきり。身をよじってうしろをふりかえることができないのである。めったなことでは怒鳴らない私も、警笛だけは腹がたつ。しかしもともと肺活量がおちているうえに体を起こすとよけい声量のかぎられてしまう私の怒鳴り声など、まわりの喧噪にかきけされて、はたから見たら車椅子の男が顔をゆがませながら口をパクパクやっっている異様な光景にしか見えないだろう。あきらめて天を仰ぐしかない　こんなことが幾度もあったのである。

バルーン交換の話にもどろう。バルーンの構造については以前くわしく述べたからここでははぶくが、要するにゴムも

しくはシリコン製の管を体内に留置するのに、ただつつこんだだけでは抜けやすいので、管のなかを二層にし、バイパスのほうに水を注入してその先端をふくらませ、体から抜けにくいようにするわけだ。じつに簡単明瞭な構造で、なんでもないことのようにだが、これが発明されるまでは抜けるのをふせぐために絆創膏を貼りまくらなければならず大変だったという。

膀胱瘻は傷口である。雑菌がはいらないように滅菌ガーゼでおおい、私のばあいはその上から網目状の粘着シートをはってガーゼを固定している。バルーンを交換するためにはまずこの粘着シートをはがさなければならぬのだが、いわば下腹部からサロンプラスをはがすようなものだから、毛などもひっぱられ、私の脳はなににも感じなくても、皮膚にとっては

相当な刺激になるらしく、反射で体がはげしくふるえる。ベツドのうえで体が波打つように跳びはねる。

粘着シートと滅菌ガーゼをとりさり、バイパスからバルーンの水をぬく。ここで不思議なことが起こる。バルーンには五ccの水を注入しておいたのに、ぬいてみると三ccしかないのである。

「これはわれわれ医者仲間でもときどき話題になって、どうしてなんだろうと試してみんな首をかしげているんですよ」

泌尿器科の医師が言う。

バルーン内の水をぬくとカテーテルは一本のまつすぐな管になる。それをしずかに引きぬく。ぬく瞬間にチュポツというかすかな音がする。

つぎにあたらしいカテーテルの先端に潤滑剤をつけ、滅菌したピンセットでつまんで、瘻のなかにクイクイクイと押しこんでいく。クイクイという音がするわけではない。それからまたバルーンに水を注入し、すこし引っぱってカテーテルがぬけないことを確認してから滅菌ガーゼをかぶせ、ふたたび粘着シートで固定する。

傷口だからやはり浸出液はつねに出ているし、ガーゼに血や膿（うみ）のついてくることも多い。通常はイソジンやヒビテンなどで傷口を消毒し、さらに状態のかんばしくないときはアクリノールという黄色い薬液をガーゼにしみこませしておく。あくまでも私のばあいである。

処置の最中にも皮膚感覚はなにひとつないのだが、カテーテルの抜去・挿入のさいにはさすがに刺激がつよいのか、過

反射といって寒気や発汗をみる。ひたいにうつすら汗をかく。心身の緊張がつよいときには処置の最中に失禁することもある。

バルーン交換が終わったあとでしばらく違和感のこのことは、めずらしくない。膀胱炎をおこしていたり、あるいは精神的なストレスがたまっているときなどには、過反射がおさまらずに丸一日じわりじわりと間歇的（かんけつてき）に冷や汗にさいなまれる。

さらに過反射がつよくなると頭にドクンドクンと拍動痛がはじまる。たいていはしばらく我慢していればおさまるものなのだが、その日はおさまらなかつた。

問題の二十二日にも頭痛がひどくなり、妻が帰宅した四時半ごろには、「頭が痛い、頭が痛い」とわめいていたという。

Ｔ医院に電話したものの先生はまだ往診中で、奥様が訪問先何軒かに連絡をとって、わが家に電話をくれるようとりはからってくださった。

手持ちの血圧降下剤のむも頭痛おさまらず。ややあってドクターから電話、「すぐに救急車でＫ総合病院へ行くように」との指示。

病院につくころにはさらに意識が混濁の度を深め、自分の名前すらこたえられず、「ピテカントロプスはフンデロザウルスと会議してどうのここの」とまったく意味不明のことを口ばしり、液状の血圧降下剤を舌下にたらそうとしてもみず

から口をあけられず、妻が舌を引っ張りだしたとのこと。

CT検査を終えると、「目が見えない、お茶がほしい」と大声で妻を呼んだ。烏龍（ウーロン）茶をのませたが、ほどなく気持ちが変わるいとうったえ、吐いた。ついで白目をむいてゴーゴー高いびきをかきはじめた。

急に倒れて高いびきをかくのは脳卒中の症状であるという半端な知識をもっている私は、意識が回復してからその様子を引き、「すこし脳に鬆（す）がはいったかもしれないな」と言った。

ナース・ステーションに隣接する特別室に二泊したのち、六人用の大部屋にうつった。

そこでひとつ奇妙な現象を体験した。昏倒前後のことも人や物の名前もうまく思いだせず、内心すこしあせるほどであ

った。にもかかわらず、不思議に中高年男性の顔を見ると、きまつて「あ、このひとは家の近所で会ったことがある」と感じたのである。男性部屋に入っていたので女性患者の顔を見る機会はなかったが、看護婦を見てもなんともない。若い男性もそんな思いを起こさせることはなかった。地元の病院だから近所の老人が入院しているはずだという先入観がはたらいたのだろうか。

そうだ、そういえば首の骨を折って日医大のICUへかつぎこまれたときも、意識が回復してから担当の看護師を見て、その顔や態度ものごしが当時の仕事仲間であったデザイナーに瓜ふたつなのにおどろき、兄弟ではないかとたずねたくなったが、いやいや名前もちがうし、そんな話はデザイナーから聞いたことがないから、あかの他人だろうと思いなおし

て、たしかめたいという気持ちをおさえたものだった。

三途の川まで行くと、むこう岸でなつかしい顔のひとたちが、おいでおいでをするという。脳になんらかの異変が生じた場合、たとえば脳圧が高まるとか酸素供給量が落ちるといったストレスが加わったときなど、記憶の表層がふっとんで「なつかし中枢」ともいっべきものはたらきがつよくなるのかもしれない。

人や物の名前がなかなか出てこない。頭のなかにそのイメージは浮かんでいるのだが、名前が浮かばなくてもどかしい。「あのう、ほら、ええと……あれ、あれだよあれ……そう、ワインのコルク。コルクと、ええと……んー、セロテープ！……」そんな調子。だれにでもあることだが、子供より大人に多く、壮年より老年に多い。やはり脳の老化とみるべきだ

ろう。

かつて潤和病院にいた半年のあいだに多くの片麻痺の老人を見た。脳卒中は左脳をやられるケースが大半で、そういうひとは顔から足まで右半身が麻痺すると同時に、まともにはしゃべれなくなる。もちろん言語能力の喪失程度は各人各様なのだが、発病以前にどれほど口が達者だったとしても、障害は過去の実績を考慮してくれない。

むかしNHKの国際局長をつとめていたという老人は、「アトト」としか言えなかった。喜怒哀楽すべての表現が「アトト」なのである。だが、しゃべれなくて片手片足をブラブラさせていても、アタマははっきりしており、折しも「牛肉オレンジ輸入自由化問題」が世の中をさわがせていたところで、自民党政府は絶対阻止を断言し、マスコミは曖昧（あ

いまい）な論調をくりかえしていた。私もそんなことをしたら小規模な日本の畜産農家やみかん農家は大打撃をこうむるから、輸入の自由化はさけられないにしてもまだまだ先のことだろうと思っていたのだが、元国際局長は、歩行訓練で孫のような年齢のPTにささえられながら「牛肉オレンジは自由化する？」ときかれると、「アートの」と力づよくうなずいたものだった。

このひとのように判断力ののこっている場合はまだいいほうで、階段をエレベーターと勘ちがいして車椅子ごところげおち、顔中血まみれになった男性や、クモ膜下出血の手術でひたいに野球ボール半分ほどのくぼみをつくった女性が、零度になったテレフォン・カードが電話器から出てきてピーピー音がなりひびいているのに、なお受話器のむこうのだれ

かに向かつて熱心に語りかけている姿などを見ると、それはだれにでも起こりうることだけに、感じるのはものあわれだけではなかった。

半身不随ということとは、理屈上もう半身は随意ということ、で、頸髄損傷のような全身麻痺にくらべればどれほどラクかしれやしないとも思った。同時に、もし頸損が脳卒中を起したらいったいどういう状態になるのだろうと考え、いささか暗然たらざるを得なかった。肩から下がすべて麻痺していて、なおかつその上が半分麻痺したら、これはもう棺桶に片足をつっこんでいるどころか、棺桶のふたからすこし顔をのぞかせている有様といってもよいのではないか。ありえないことではない。

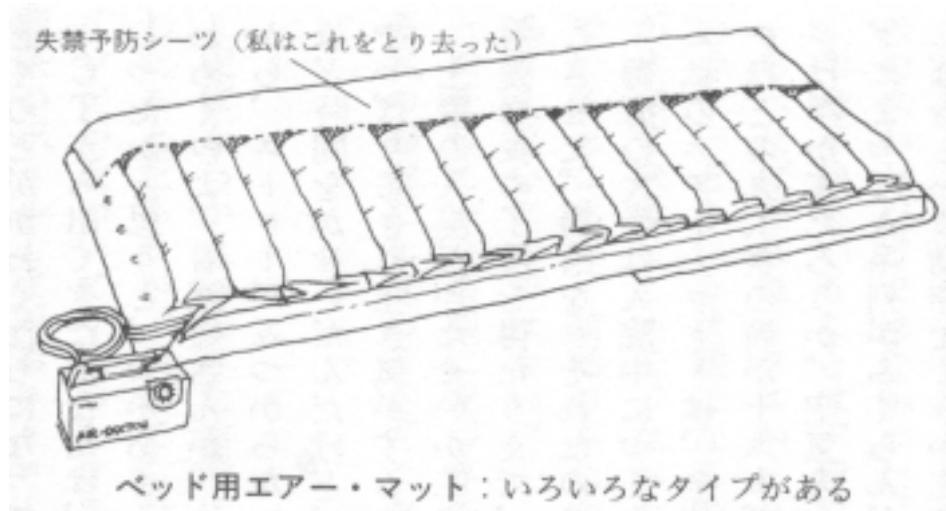
おそれていた事態に近づきつつあるのかもしれないとい

う思いが、K総合病院のベッドにいる私の脳裡にしばらくとどまっていた。

実家からかえってきた途端にはげしい頭痛をつつたえてさわぐ私を見た妻は、さぞかし動転したことだろうが、かねてこのような事態のあることを覚悟していたものとみえ、救急車のサイレンが近づいてくるのをききながら入院に必要なものを手ばやくそろえ、その荷のなかに烏龍茶のボトルとまがるストローをつっこむこともわすれなかった。私は頸髄損傷の事故以来ひどくのどがかわくたちになってしまったのである。

「CTから出てきたあなたは、もう全然わけのわからない状態になっててさあ、妙なこと口ばしってたかと思うと、おかあさん！　おかあさん！　体を起こしてお茶を飲ませて！　お茶つてわめくのよ。看護婦さんが、いま飲ませると吐くかもしれないからやめたほうがいいっていつから、ストローがみつからないの、いまさがしてるからちよつと待っててねっていつて二十分ほど時間をかせいだんだけど、それでもまだお茶、お茶、つてせがむから仕方なくあげたら、やっぱりじきに吐き気がするっていつんで横を向かせてビニール袋に吐かせたの」

土曜の入院だったせいか主治医もさだまらず不安だったが、とにかく入院と決まると、妻は看護婦長の了解を得たうえで、子供に電話して私が毎日つかっているエアーマット



を持ってこさせた。褥瘡をおそれたのである。

褥瘡の大半は入院中につくられる。残念ながらそれが日本の現実である。

（私のエアー・マットは、全体の大きさが、たて百七十センチ、よこ八十センチ。直径十センチほどの丸太状の筒が十六本ぴったりに付いて並んでいる様子を想像

すれば、おおよそのイメージは浮かぶだろうか。空気丸太はA B A B A B ……と二系列に分かれており、付属の電動ポンプによってA系列がふくらんだときにはB系列がしぼみ、つ

ぎにB系列がふくらむとA系列がしぼむという動作をくりかえすことによってベッドと体が密着することをふせぐ。）

CTの検査結果は異常なしと出たが、妻は光子姉さんに電話して土日家に泊まってくれよう頼み、自分は私のとなり補助ベッドに寝た。特別室だったからそれができたのだが、翌日曜の昼ごろ意識を回復した私が、「もう大丈夫だからおまえは家に帰ったほうがいい」と言っても、まったく聞きいれようとしない。

いつも水曜と日曜に夕食づくりなどをたのんでいるボランティアの鈴木さんが、妻用の弁当をつくって持ってきてくれた。ひとがいま何に困っているか見抜いて、すばやくそれに対処できるのである。地に足のついた能力である。

月曜日、六人部屋に移動。補助ベッドはないし、だいぶぐ

あいもおちついてきたから泊まらなくてもいいと言ったのだが、「待合室のベンチをくっつけてそこに寝る」と妻は頑張る。看護婦がやってきて、「ここは完全看護で付添いの必要はない、体位交換も三時間おきにするので安心してほしいと言っても頑としてゆずらなかった。

妻の気持ちもわからぬではない。全身麻痺の患者には付添いなしで完全な看護などできはしないという確信を、二人とも以前の入院生活を通じていただいていたのである。しかし今回の入院はわずか数日のことであろうから耐えられないことはない。それになんといっても毎日を鬱々と過ごしている妻が、いきなり付添いのような激務に就くのは危ういように感じられた。

「付き添ってくれるのはいいけど、そんなにはりきってい

たら家にかえってから反動がくるよ」

いくら説得しても、「安心できない、信用できない、心配だ」と声高に言いはるものだから、看護婦たちもムツとした表情である。たまたま見舞いにきてくれた本條さんが見かねて、「自分がかわりに待合室に泊まりますから、奥さんは休んでください」と申し出てくれ、それでやっと納得した。

妻を説得するには、ナース・コールの問題も解消しなければならなかった。私は指がうごかないから、ふつうのナーズ・コールが押せず、これはたしかに不便だけでなく、かなり危険なことでもある。見ると、ショートピース大のプラスチックの中ほどに丸いくぼみ状のスイッチが付いた形式のものである。うっかりさわって作動することのないように、わざわざくぼませてあるのだが、これでは私にはつかえない。

そこで一計を案じ、ワインのコルクとセロテープを持ってこさせた。コルクを輪切りにしてくぼみにはめこみ、セロテープで止め、凹式スイッチを凸式に変えた。これなら腰の横あたりに置いておき、手の甲でスイッチをたたけばつかえるだろうと踏んだのだ。大成功だった。

熱は下がらず、頭痛もおさまらなかつた。

MRIというCTに似た器械の中にはいつて脳と頸椎（けいつい）の写真をとった。CTは体を直角に輪切りにした断面写真しかとれないのに対し、MRIはななめ切りの写真もとれる一段と精巧な検査機器なのである。CTよりも検査に要する時間が長く、体を横たえたトンネルの中いっばいに「ゴンゴンゴンゴン、ダッダッダッダ」と不快な音がひびきわたるのが難点で、その重たい音をきいたとたんに頭痛がは

げしくなった。

「中止しますか？」

検査技師の問いに、いまやめたら後日また病室のベッドからストレッチャーにトランスファー（乗りかえ）し、検査室にはこばれたのちストレッチャーからMRIにトランスファ―して検査を受け、終わったらまた逆の順序で病室のベッドにもどらなければならぬという、私と介護者のわずらわしさを考え、

「いや、つづけてください」

と答え、我慢した。

結果は異常なし。

「ただのカゼだから退院するように」と主治医から告げられた妻は、「頭が痛いと言っているし、熱もさがらないのに

退院しろでは納得できない」と食いさがった。

「それではご主人に説明するからいつしよに行きましょ

う」

怒って妻の腕をつかんだ主治医の手を、

「さわらないでよ！」

ふりはらったので医師は激昂し、

「今後二度とK病院の敷居をまたぐな！」

と怒鳴った。

というのは家に帰ってしばらくしてから聞いた話で、

当時そんなやりとりがあったことなど、ついぞ知らなかった。

「おいおい本当かよ。よわっちゃったなあ。それじゃあオ

レはもうK病院に行けないじゃないか。しょうがねえなあ」

K病院は、近所で唯一の総合病院なのである。

「いいのよ行かなくて、あんなとこ。尿培養で緑膿菌が出たって言ったときながら薬も出さないで、あなたが頭が痛い、頭が痛いって言って、熱も八度四分もあるのに、ただのカゼだから退院しろって言うのよ。アツタマきちゃう。なによ若造のくせしていばっちゃってさ」

だれでもはじめは若造だから仕方のないことなのだが、そういうえば昔、まわりはみんな大人ばかりだったような気がする。学校の先生もおまわりさんもお医者さんも政治家も、みんな自分よりはるかに年長で偉く見えたものだ。それが今や年をたずねるまでもなく明らかに自分より年下のひとが多くなってしまった。「馬齢をかさねる」ということわざもあるし、年をとったからといって利口になるものでもないことは、わが身をかえりみればわかることだが、やはり医者など

は自分より年上であるほうが安心できる。

木曜日に妻が都立M病院へ行って自分の主治医に私の症状を話すと、元脳外科医の先生は「髄膜炎（ずいまくえん）のおそれがある。自分の先輩が脳外科にいるから即刻転院して検査したほうがいい」とのご意見だという。もう病院生活には飽き飽きしていたが、「髄膜炎から脳膜炎になったらどうするの」という妻の剣幕に反論するだけの根拠をもちあわせていなかった。

転院は一月二十九日（土）、救急車でという計画をたてた妻は、すぐにその手配をした。そのはりきりかたがかえって不安だった。ふだんはひねもすつつらつつらして夢と現実のさかいても分明にしがたいような日々をおくっているのに、この活発さはどうだ。このままずっと元気でいてくれればこん

なにうれしいことはないが、一時的な興奮だとすると、その後の反動を危ぶまずにはいられない。

転院の朝、若い看護婦が食事介助をしてくれた（K総合病院の食事は、熱いものは熱いまま、冷たいものは冷たいまま病室まではこばれてきて、なかなかうまい）。病院ではたつきながら看護学校にかよっているという。二十歳ぐらいだろうか。病院や学校、寮のことなどをゆるやかにやさしくそして熱心に話しながら、スプーンを口にはこんでくれる。病人の介護がしたくてこの道をえらんだのだろう。たのしそうに介助をしてくれるのがうれしい。いい看護婦になるだろう。わかれぎわに、「きのこの夜折ったのよ」といって、ちいさな鶴を十一羽糸でつらねたものをくれた。

M病院に転院、脊髄液をとって検査、結果は異常なし。髄膜炎の心配は消えた。もう何もすることはなかったが、とりあえず一週間入院して様子を見るということになった。M病院の食事は、病院食としては平均点である。まずい。

ただ食って寝ているだけではあまりにも能がない。せっかく入院したのだから体重を測ってもらうことにした。以前入院した国リ八には車椅子ごとのれる体重計があったが、私は車椅子が大きすぎて測れなかった。ここにはストレッチャーに寝たまま測れる装置があった。六〇・五キロ。ほぼ予想どおりだった。受傷以前は六八キロだったから、約八キロ分の筋肉が落ちたことになる。骨も細くなったのだろうか。肺活量も測りたかった。受傷直後には八〇〇ccに落ちていたが、いまはもつとふえているはずだ。が、残念なことに肺活量の

検査器具は置いてなかった。

二人部屋のあいかたは、脳をやられているらしく、一晩中大きな声でわけのわからない寝言をしゃべりつづけ、おまけに隣接したナース・ステーションからはガラス窓越しに煌々（こうこう）たる蛍光灯のあかりがはいつてくる。ハルシオンを服用したくらいではまんじりともできぬ夜がつづいた。入院以来、便通もわるくなった。

「世の中に寝るほど楽はなかりけり世の馬鹿どもは起きてはたらく」という戯れ歌がある。これはふだん起きてはたらくすこやかなひとについてはあてはまっても、身ごこきができず、しかも腕や背中に圧痛のある者にとって一日中横たわっていることは、苦痛以外のなにものでもない。車椅子にすわって体を縦にしたかった。できればカットアウト・テープ

ルに前のめりして背中を楽にしたかった。前のめりという除
圧の快樂をおぼえてしまったいま、受傷後一年以上におよん
だ入院生活に耐えられたということが信じられない。一日も
早く退院したかった。

退院当日、二月四日（金）は友人の竹上・雁本（かりもと）
の両氏が手伝いにきてくれた。妻はお見舞いにいただいたピ
ンクのチューリップを病院においてかえるのはもつたいな
いと、アルミホイールとラップと新聞紙を持参、喜々として花
束をつつんだ。むかえには東京寝台株式会社の寝台車をたの
んだ。

「この車はとてもしずかに走るんですね。え、シボレーな
んですか。まあすごい。おとうさん、シボレーだって。全然
ゆれないもんね。救急車とはのりごこちがちがうわよね。ほ

んと今日は天気もよくて退院びよりだわ。このチューリップも家についたらすぐ花瓶にいれてあげましよう。こんなにきれいでかわいいチューリップってめずらしいでしょ。ほら、この光沢がなんともいえず上品よね。ね、ほら」

妻はしゃべりづめだった。常用している薬の副作用で声帯がとじきらずに空気がもれ、いつも寝起きのようなかすれ声なのだが、気分が高揚しているためか、ふだんより声に張りがある。目もいつになくパツチリと見ひらかれていた。

「運転手さん、寝台車っていつのはどのあたりまで行ってもらえるものなんですか。まあ、そんなに。ああそうか旅先でたおれたときねえ。そこまで行くと料金なんかもずいぶん……四十五万！ ええ、ええ、あ、なるほど往復することになるものねえ。はい、そこを右です。さあもうじきおうちよ、

おとうさん」

かぎられた車窓のそとに見おぼえのある風景があらわれはじめ、バックして路地にはいると車はとまった。うすぐらい寝台車からストレッチャーがゴトゴトと引きだされた途端、私の視界一杯にあかるい空がひろがった。その水色の空をまっ二つに分けるように一本の飛行機雲がくつきり伸びている。ゆくてをさえぎるひとはけの雲もない天空のなかをホッチキスの針ほどの銀色にかがやくジェット機がゆつくりと進み、すこしあとから繰り出されるまっ白な細い雲は、後尾へたどるほどに幅ひろくそしておぼろになって果ては水色の空にとけこんでいた。家のなかに運びこまれるわずかに五秒間ほど、しあわせな気分にはたれた。

ベッド正面の壁にはオカムラのユニット家具という棚が三列、天井までならんでいる。背後のあいた棚なので、電気の配線がしやすく、そこにはテレビのほかオーディオセット、ファクシミリなどがおいてある。

ベッドの左わきに電動車椅子を横づけし、天井走行型のトランスファー・システムで車椅子に移る。完全に脱力した成人男性を人力でベッドから車椅子に移すには、最低二人の人手を必要とする。これを一人でおこなうときは、かならず器械の助けをかりなければならない。強引に独力でやりつづければ、今度は介護者が腰をいためて身づつきできなくなる。

トランスファー（乗りかえ）の道具には幾種類がある。私

がつかっているものは、あらかじめ天井に埋設したレールに
リフト用具を組みあわせたもので、場所をとらない点が便利
で体裁もいい（ただ、このシステムは新築家屋向きで、改築
には適用できないかもしれない。改築家屋には部屋にレール
を支える枠を組むシステムや床走行式がふさわしいだろう）。



天井走行型トランスファー・システム：
これがなければ私は寝たきりになる

操作は、介助者がリモコンでおこなう。手がつかえるひとは自分ですればいい。リフト用具のボックスは、天井のレールの下を走行する。まるでモノレールカーのようだ。ボックスからは頑丈なハンガーが丈夫なワイヤーでぶら下がっており、リモコンの「下」ボタンを押せば、ワイヤーが伸びてハンガーがおりてくる。

横たわっているひとの両膝のつらと両脇の下に一本ずつ太いベルトを通しておき、ハンガーの両端に付いているフックにかける。「上」ボタンを押せばワイヤーがボックス内に巻き上げられて、体が宙に浮く。車椅子の上まで移動して静かにおりる。

ほかのトランスファー・システムも、あがって、横移動して、さがるという基本に変わりはない。

車椅子にすわったら、私はそのまますすぐすすんで、部屋のすみからもってきたキャスターつきのカットアウト・テーブルに前のめりをする。車椅子の左側には本棚がせまっついてスペースはない。四メートル×六メートルというずいぶん大きな部屋なのだが、ベッドと電動車椅子だけでも場所をとってしまう。重度障害者用の部屋は、なるべく大きくありたい。

トランスファアの準備をしているところから、もう一刻もはやく前のめりがしたくてたまらない。背中がキリキリと悲鳴をあげている。高さ調節のできるテーブルは、車椅子が入るように最高の位置まであげてあり、テーブルの上には枕が積みあげてある。所定の位置まで車椅子をつっこんだら、テーブルのキャスターにストッパーをかけ、上半身を前にたおし、

顔を枕の上にのせる。これで背中と腕の除圧ができる。このときの安堵感といったらない。大きなため息が出る。

以前は食事時になると、となりの台所のテーブルまで移動していたのだが、めんどうなのでやめた。どれほどめんどうかというと、まず前のめりの体を起こしてもらい、カットアウト・テーブルのストッパーをはずしてわきへよけ、さげであった車椅子の運転レバーをあげて台所まで運転し、そのままの姿勢では苦しくて食事どころではないのですこしリクライニングし、食事が終わったらまた背もたれを起こしてもとの位置まで運転し、レバーをおろして、しかるのちにカットアウト・テーブルをセットして前のめりをしなければならぬからである。介護する側もされる側も、そして読者もおもわず読み飛ばしたくなるほどめんどうなのである。

現在は食事をお盆にのせて車椅子の前のテーブルまで持ってきてもらっている。介護というものを考えるさいには、介護される側の都合とおなじだけ介護する側の都合も考慮しなければならぬ。

退院したのは、ボランティアの来山くんが来てくれる金曜日だった。ベッドから車椅子にうつると、いつもとちがって私の左側にスペースがあくような位置に車椅子をとめた。たいていの人は右ききだから右側をあけておけばいいのだが、来山くんは左ききだから私の左に立たなければ食事介助がやりにくいのである。

金曜はいつも子供が二人とも塾へ行ってしまう、妻は実家へ泊りに行って不在。そこで六時から九時までの訪問を依頼していた。食事介助、食器の洗い上げ、前のめりをしながら

の書類整理、本や雑誌のページめくりなどを手伝ってもらったあと、車椅子の背もたれをフル・リクライニングして歯をみがいてもらう。フル・リクライニングしなくても歯はみがけるのだが、長時間前のめりをしたあと体を起こすと起立性低血圧で失神することがある。その予防のためである。

その日、妻は家にいたが、来山くんにはいつもどおり来てもらった。二週間ぶりの自宅の夜は、順調になにごともなく過ぎた。二人とも疲れていたから、その夜は十一時ごろ右側臥位（右肩を下にした横向きの姿勢）に体位交換してねむった。

翌土曜は、ひさしぶりに会った橘さんと三人で入院時の様子などを話しながら比較のおだやかな一日をすごした。妻は、「K病院についてCTの台にうつると、あなたはそれまで

もわけのわからないことを口ばしっていたんだけど、急に、
へーん！　これが何々なのか、へーん！　ふーん！　て、す
ごく挑戦的なばかりにしたような態度をとりはじめたの。それ
を聞いたら、ああこれはきつと私がいつもあなたにアタリち
らしているものだから、あなたはこんなかたちで日ごろの鬱
憤（うつぶん）をはらしてるんだと思って胸が痛んだわ」

しおらしいことを言う。私はすこしやさしい気持ちになり
ながらも、「ここ数年の経験を思いおこすと安心しきれなかつ
た。なさけのこまやかなところは、かつてとにも変わらな
い。これがつづいてくれればいいんだけど……」。

さわぎは、土曜から日曜にかけての深夜にはじまった。深
夜、いつものように右肩が痛くなってめざめた私は、ねぼけ

て病院にいるものと勘ちがいし、「看護婦さん、体交おねがいします」と言ってしまったのである。あ、いけね。気づいたときは遅かった。起きあがった妻は、

「そう、あなたはやっぱりあたしのことを看護婦だと思っているのね」

猛然と怒りだした。それまでに幾度となくくりかえされてきた口喧嘩の火種に息をふきかけてしまったのである。あたしは家政婦でもなければ看護婦でもないのよ。あなたにとつてあたしは何なの。あたしたちのどこが夫婦なの。夫婦としてのよろこびがどこにあるっていつの。そとを歩けば若いカップルはいちやついてるし、老夫婦はたのしそうに肩をならべて歩いてるし、腹のたつことばかり。あなたは一日中あれをしてくれこれをしてくれ、そんなことしか言わないんだ

から。ひとつつもたのしみっていうものがないのよ……。

文句を言いながらも上向きに体位交換してくれる。しかし怒鳴られながら介護をうけるといっつのは、そうとつづらいとである。頸損になってみなければわからないというせりふを私は好まないが、これだけはすくなくとも似たような体験をしたひとでないと想像しにくいかもしれない。仏頂面（ぶつちようづら）は気を重くさせ、ためいきは心をヒヤリとさせる。

おのれの失言からはじまったことである。あまり強気にもなれず、いやそんなことはないんだけどとかなんとかモゴモゴ口ごもっていると、話は二十五年まえまで一気にとんでしまった。またか。あるときあなたはあたしを愛してなんかいなかったのよ。あたしの体がほしかっただけなんでしょ。そ

んなことないよ、愛してたさ、何十回おんなじこと言わせるんだ、と応えながらも、あまり何度もおなじ言葉を聞いていると、次第に相手の言い分が正しいような気もしてくる。かといつて、そうだ、おまえの言つとおりだと肯定したところで納得するとも思えない。まして、恋情と欲情が区別しがたいものであるところに若い男のなやみがあるのだよなどと言えば火に油をそそぐようなものだろうしなあ、どうしたものかと考えているうちに、怒ったまま妻は台所へ行つて、境の引き戸をピシャツとしめてしまふ。

「あのさ、ちょっとお茶くれない？ のどかわいちゃって」
「もう、なぜもつとはやく言つてくれないの」

夜中の体位交換のときにつめたい烏龍茶を飲むのは、いつもきまったことではないか。してほしいことを手順よく列挙

すればしたで、つづけざまにいろいろ言われてもいっぺんにできないという言葉がかえってくる。重度障害者にはお茶を飲む自由もない。が、いまそれを言つと事態はますます紛糾するだろう……。

お茶をいれたコップからさしのべたストローの吸い口が、私のくちびるにとどかずウロウロしている。妻の顔を見ると、まぶたがほとんどじている。強い眠剤を飲んで寝こんでいたところを起こされたのだ。無理もない。それも毎晩のことだ。もうしわけない。

おぼつかぬ足どりで台所にもどった妻が、なにかをテーブルから落とす、こまかいもののちらばる音とちいさな悲鳴がきこえた。ぶつぶつ言いながらかたづけしているのだが、目もよく見えず意識も朦朧（もうろう）としているためうまくい

かないらしく、そのうち癩癩（かんしゃく）をおこして金属製のものを投げつけるするどい音がして、ついで泣き声がかこえはじめた。飛んで行ってたすけてやりたいが、それができない。

地獄だなあとと思う。地獄は現世にあり、と天井のくらやみにむかってつぶやいてみる。

妻が寝室にもどってきたのは、朝ほのあかるくなってからのことだった。それまでカチカチとライターの火をつける音や冷蔵庫をあけしめする音のあいまに、ころんだりぶつかったり物を落としたりする音がまじった。おそらく追加眠剤と朝の薬を飲んだにちがいない。もう意識も記憶もないのだから、またけがをしなければいいのだが、と思うと気が気ではなかった。

ウトウトしかかっでは物音で目をさますということのくりかえしだから苛立ってもきて、まぎらわすために環境制御装置でベッドを起こしてテレビをつけてみたが、日曜の明け方にはテレビもラジオもやっていない。窓の障子が白んできてカラスが鳴きはじめるころには、絶望的な気分になってくる。

ふと気がつけば、テレビが子供音楽会のようなものをやっている。タイマーでついたのだ。いつの間にかねむっていたようだ。背中が重苦しい。肩胛骨がベッドにおしあげられて、二の腕が痛む。ベッドから肩胛骨をはなしたい。もうはやく車椅子にうつって前のめりしたい。しかし、子供はふたりとも大きくなるにつれて朝がおそくなってしまった。緊急事態でもないかぎりこんなにはやく起こすわけにもいかない。

九時になるのを待って環境制御装置で二階のインターホンを鳴らす。

妻は昼ごろ一度目をさましたが、薬を飲むとまた寢床にもぐりこみ、夕方、手伝いの鈴木さんが来たときもまだねむっていた。子供に夕食介助をしてもらって、やれやれと、その日最後の前のめりをしたころに起きてきた。テーブルの前をとおりがかった妻に、

「目、さめた？」

ときくと、

「んん」

否定とも肯定ともつかぬ返事である。

「ご飯ちゃんと食べたほうがいいよ」

「いらない」

「朝も昼も食ってないんだから」

「そんな気になれると思う？」

ひとが心配して言っているのに、そんな迷惑そうな声を出すならオレはもう知らんぞとばかり、こちらもムキになってだまりこむ。台所からは粉薬の紙袋をあける音と錠剤をシートから押し出す銀紙の音がきこえたあとは、つきのわるいライターをカチカチ押す音がときどきひびくのみである。

私は枕のうえにあごをのせてテレビを見ていた。お笑い番組だが、笑い声をたてるのもはばかられる雰囲気、あまりおもしろくも感じられない。バカ番組は、一緒に笑ってくれるひとがそばにいたりとおもしろさが倍加する。

息子が小学生のころは、下のテレビと一緒に見ながらコン

トの落ちあて競争などしたものだ、中学生になってからは食事が終わるとすぐ二階にあがってしまい、それでおなじ番組を見ていたりする。二歳上の娘は、もうとくに寄りつかない。二人ともフニヤツとした顔で近づいてくるのは、なにかをねだるときだけである。

思春期になれば親離れが始まるのは、自然なことである。動物はすべてそうだ。むしろ親の側の子離れが、積極的におこなわれる。タンチョウヅルなどは、子わかれの時期になると、親が子をついたり蹴とばしたりしてテリトリーから追いやらう。人間だけがいつまでも子供を抱え込もうとする。親離れに反抗期という名称を与えたのは誰なのだろう。親の側からの一方的なとらえ方にいかにも学術的な用語を与えてしまったばかりに、どれほど多くの親子関係がゆがんでしま

ったことだろう。

子供は、時期が来れば親がうとましくなる。子供自身、なぜうとましいのかわからない。親に特別な欠陥があるわけはないから、ギクシャクした関係を修復しようとして親子で話しあつたところで、冷静な議論にはならない。子供が説教されるかたちになってしまふ。おもしろくない。そこですます親から遠ざかる。自分は親不孝なのだろうかと自責の念さえわいてくる。

私はそう考えている。子供の自立をしずかに見守つてやりたいと思う。……と、考えてはいるのだが、さみしい。腹立たしくさえある。うとんじられるおぼえはない。

それともやはり、わが家のばあいは特別なのだろうか。母親はいつもふさぎこんでいるし、父親はなにかと用を言いつ

ける。そのうえ両親は始終言い争っている。たしかにこれではそばにいたくなくなるのも無理はない。気をもむばかりである。

八時半になった。一時間前のめりをしているので、もうだいたいぶんあごが痛い。ここで子供がおりてきてトランスファーしてくれれば、なにこともなく事ははこぶのだが……。しばらく我慢したがおりてくる気配がない。たえきれず、

「ベッドへあげてくれるかい？」
と妻に声をかけた。賭けだった。

「いまそんなことができる状態かどうか、考えたらどうなの」という答えがかえってくるかもしれない。だとすると、そのあとに「あなたはいつも自分勝手なのよ。二十五年前もそうだったわ」という言葉がつづくにちがいない。あるいは

「ベッドにあがるから子供を呼んでくれるかい？」という言い方をしたほうがいいかもしれない。でも今日はそちらを採ると「もうあたしはこの家には必要のない存在なのね」という返事がかえってきそうな気がしたのである。

すこし間があってから、膝のうしろで椅子をおしやる「ゴゴ」という音が台所のほうでした。

妻はだまつたまま私の両肩に手をかけて車椅子の背もたれまで体を起こし、だまつたまま洗面所にむかった。あ、歯みがきはいいよと言いかけて、やめた。余計なことを言っ、せつかく順調にいきかけているのに思わぬ波乱を起こしたくない。水をいれたコップと金属製のガーグル・ベース、それに電動歯ブラシをもってきた。

いつもならここでリクライニングするのだがと思いが

らも、だまって口をあけ歯をみがいてもらった。体を立てたまま口だけ天井に向ける姿勢は、意外にしんどいものだ。まあしかしこの姿勢でやることもあるし……。のどのほうに歯みがきの泡のまじった唾液がながれこんでくる。そのうち……。

「おとうさん！ おとうさん大丈夫？ おとうさん！」

失神していた。妻は私の足のほうにまわりこみ、両足をかかえあげていたが、カットアウト・テーブルにはばまれて十分にはあげきれず、それで意識の回復もおくれたようだった。

「やあ、すまんすまん。失神しちゃったんだね」

「すまんすまんじゃないわよもっつ！」

半べそをかいている。

「もう大丈夫だから」

口の中が歯みがきのミントでからい。

「みがいてたら急にブラシをガリガリかじりだすんだもの」

「ごめん、ごめん。もう平気」

テレビの画面はまだまっ白だが、音声ははっきりしてきた。なににもはじめて失神したわけじゃあるまいし。日常茶飯事ではないか。失神をおそれていたなら頸損は生きていけない。そう思った。口にはしなかった。

妻はなにかとげとげしい言葉をはきだしながらカットアウト・テーブルを移動させようとしていたが、床においてある二枚の座布団がひっかかってうごかない。子供はテレビの前の座卓で食事をするのである。カバンや眼鏡ケースなども床に散乱していた。妻は座布団を一枚つかむと座卓にたたき

つけた。

「もういや、こんな生活！」

さげびながらもう一枚もたたきつけた。こうなってしまうたらいさめても効果はない。危険なことをしないかぎりだまっていようと思った。

プラスチック製の眼鏡ケースをつかんでふりあげた。これを木の机にたたきつけたら、われてとびちる。怒鳴りつけて制止しようとした瞬間、座布団のうえになげた。力を加減していた。

「どづして毎日、毎日、ヒヤヒヤしながらくらしていかなきゃならないのよ！」

それを聞いてハツとした。そうか、おびえているのか。

こちよい風の吹く水面を軽快に走るヨットののような快活な女性だった。しかし、黒い雲が押しよせて以来、暗鬱の海底にしみこむ時間が長くなり、時として一気に上昇したかと思うと荒れくるつ竜巻きの中に身をおどらせる。そんな日々がつづいた。おのれをおそった病魔の姿を見さだめようと朝から晩まで、ときには夢のなかまでおいかけつづけ、ほりさげつづけ、再起への手がかりをつかみかけたところで、私が全身麻痺になった。海が裂けたうえに天がふってきたのである。

介護に疲れはて、思わずあたりちらしたり、ときには手をあげたりして、あとで自己嫌悪におちいり、気をとりなおしてやさしく接しようと思っても、べつに状況が改善されていないわけではないし、怒鳴られたほうは心の扉をそのたびにす

こしずつ閉ざしていくから、気持ちのかよいあい次第にうつすれ、そこですますます苛立ちがつのる。そういう構図だろうと思ひ、懸命になって妻の肩の荷をかるくするようつとめてきた。けずれるものは全部けずった。それでもなお回復のきざしをみせないという事態にたちいたって、いよいよ疲れているのは体よりむしろ心であることだけははつきりしてきた。

そして今日またひとつ、心労の一因におびえがあることに気づいたのである。理解しがたい惑乱の内奥を垣間みる思いがした。

ヒマワリの種を買いに

ヒマワリの種を買いに出かけようと思った。シジュウカラにやるのである。ベッドから見える餌台にやってくる野鳥たちは、種類によって餌も異なる。黒いネクタイをしめたシジュウカラの好物は、ヒマワリの種。太い竹筒を一節たてにわたったものの両端をピラカンサの枝につるして餌台にしていた。

鳥は音と動くものに反応するようだ。ベッドサイドのガラスはアルミサッシで遮音性が高いせいか、こちらがじっと

していれば安心して餌をついばんでいる。

バード・ウォッチングに行けない体になってしまったので、鳥に来てもらうことにした。まず窓辺に木を植えなければならぬ。妻と二人で木をえらんだ。妻はどうしてもヒイラギナンテンがほしいといった。魔除けになるのだそうだ。

高島平団地に住んでいたころに入手した『樹の本』（板橋区、一九八二年発行）を参考にした。初心者にもとてもわかりやすい。木の種類は「株立ち」と「幹立ち」とに大別できるということを教えてくれたのもこの小冊子だった。いままに出会った無料本中の白眉と書いていいだろう。

ピラカンサを植えればヒヨドリが来るにちがいないと思つた。南に面した二間のガラス戸にそって東からマンリヨウ・ソヨゴ・ヒイラギナンテン・ピラカンサ・カイドウ・サ

ラサドウダン・シヤクナゲ・センリヨウ・ベニカナメ・マユ
ミ・ツツジ・キンモクセイを植えた。これほど詳しく書ける
のは、植木屋に図をかいておいてもらったからである。丈の
低いものは、ベッドに横たわっている私からは見えない。

木を植えると心がなごんだ。それまで窓のそとに見えるも
のといえば隣家の壁と塀だけだったのである。私の位置から
見える場所にピラカンサを植えてもらった。

シジュウカラが肉の脂身を食べることは、知っていた。む
かし母が脂身をミカンのネットにいれて木の枝につるして
いたのを見ておぼえていたのである。

それを試してみたところ、シジュウカラだけでなくメジロ
もやってきた。これはうれしかった。窓の障子を閉めていた
数日間のうちに、シジュウカラのとはちがう、こまかい食

（は）み痕が脂身についていたので、いったいどんな鳥が来ているのだろうかと思っていたのだ。メジロなど間近に見たのはそれが初めてだった。メジロはウグイスに似た鳥で姿がよく、ウグイスよりウグイス色をしている。目のまわりが白いのでそう名付けられたのだろう。いつも二羽でやってくるのがほほえましい。シジュウカラもかならずつがいできてくる。ネクタイの太いほうがオスである。

小鳥がついばんでいるうちはよかったのだが、ある日カラスがガアガアいいながらネットごと持って行ってしまった。カラスがかわいく感じられないのは、色のせいだけではあるまい。ネットを枝にぐるぐる巻きにして堅く結んでみたが、翌日には跡形もなかった。頭がいいから、餌をつけたとたんにまたやられてしまうにちがいない。それ以来、脂身はあき

らめた。

シジユウカラにはヒマワリの種を、メジロにはミカンをや
ることにした。ミカンを水平二つ切りにして枝に刺すのであ
る。冬は餌が少ないせいかひっきりなしにやってきて、ミカ
ンのふさの袋だけを放射状に残してきれいに食いつくす。

シジユウカラのオス・メス判別法を教えてくれたのは、『フ
イールドガイド日本の野鳥』（財団法人日本野鳥の会、一九
八二年発行）である。野外でつかうことを念頭において作ら
れた堅牢な本で、わが家のものは、表紙が手垢でうすよごれ
ている。大井野鳥公園のスタンプが押ししており、表紙の内側
には、品川駅東口から大井町駅東口までのバスの時刻表の写
真が、はりつけてある。書きつつすより正確だし、記念にも
なると思って、停留所の時刻表を写真にとった。それほど通

ったのである。

双眼鏡は、八倍のものを買った。初心者にはこれくらいの倍率がちょうど良いのだそうだ。高倍率になればなるほど遠くの鳥が見えるが、視野がせまくなって鳥が見つげにくい。

ある冬、見るだけでなく写真をとりたくなり、会社から二〇〇ミリの望遠レンズを借りて出かけた。初めての望遠レンズである。バスに乗りこんだときは、オレは望遠もってるんだからな、なめんなよ、とあごがすこし上を向いた。ところが野鳥公園に着いてみると、半円形の塀に銃眼のようにあけられたのぞき穴に、先着のバード・ウォッチャーたちは、まるで土管のようなレンズをつっこんでいるではないか。はずかしくなって、撮影もそこそこに、私はスキットルに持参したウイスキーをぐいぐい飲んだ。

子供は鳥より売店のほうに興味があるようだったが、ときどきベテランたちに抱っこされて、三脚の上の望遠鏡をのぞかせてもらったりしていた。

二人ともまだ小学校にあがる前で、私たち夫婦も三十代前半だった。家のなかに活気がみちていた。

「もったいないくらいしあわせだった」と当時をふりかえって、妻は迷懐する。あのころがわが人生の黄金期だったというごとに、いまになって気づく。

ヒマワリの種を買いに行きたかった。餌台にいれてやると、シジュウカラは三十分ほどで飛来する。定期的に偵察飛行をつづけているのだ。二羽で交互に餌台にとまり、またたくまに空（から）にしてしまう。空なのがわかっていのに飛ん

できて「ツツペン」と一声鳴いていくこともある。催促しているように聞こえる。

出かけようと思っても、簡単にはいかない。月水金は体の処置で午前中はつぶれてしまっし、午後も用がある。土曜は午後泌尿器の往診があるから、それが終わるまでベッドを離れられない。日曜日は人手が足りない。いまのところ火木がいい。

しかしあまり寒い日は出る気になれないし、真夏の暑い日はガラス戸越しに外のギラつく照り返しを見ただけで頭の中にかげろつがたちそつだ。雨が降ったら季節を問わず計画はすべて中止。

私が外へ出るのは、一年三百六十五日のうち十五日ぐらいだろう。退院して約六年。年を追つごとくにふえてきている。

在宅頸髄損傷者としては多いほうだと思う。国リハで同室だったひとにひさしぶりに電話をかけたところ、帰宅したのが民間アパートの二階だったせいもあるのだろうが、退院してから三年間一度も部屋から出たことがないという話だった。いくつもの条件がととのわなければ外出はむづかしいのである。

わが家には車椅子が二台ある。一台は電動、自分で運転する。もう一台は介助用、ひとに押してもらう。退院前の計画では、電動は室内で、介助用は外出時につかおうと思っていた。退院後しばらくはそうしていた。

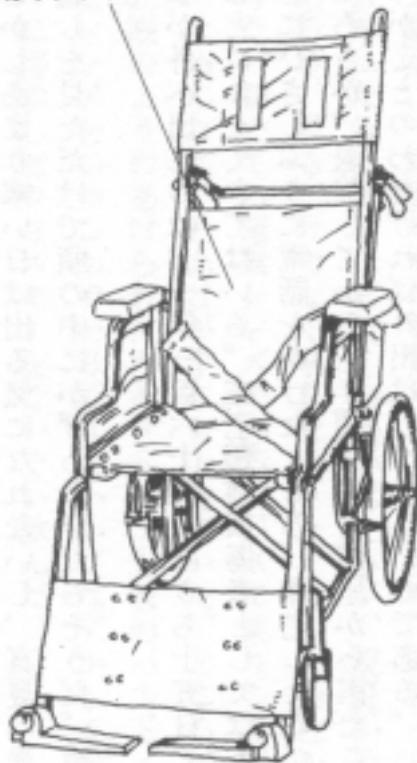
どちらをつかうにしても、車椅子に移る前に、万一の失禁にそなえて紙おむつを当て、ズボンを二枚はくという身支度をしていった。完全に脱力している成人男性におむつを当てた

りでしていたのである。ほかのひとには頼みにくかったし、また人手もなかった。介助用車椅子を押すのも妻の仕事であった。

この方式は、妻のダウンでじきに改善を余儀なくされた。大儀そうな介護は、されるほうにとってもつらい。とにかく簡単にすることを心がけた。

現在のやりかたはこうである。電動車椅子の座席に毛布な

背はリクライニングできる



介助用車椅子：ひとに押しってもらう

りズボンを
はかせたり
するのは容
易なこと
ではない。そ
れを妻ひと

リタオルケットなりを横長に敷いておいて「ローホー」というフロアテーション・マットをおき、その上に紙おむつを敷いて座席をととのえる。そこへ下半身はだかのままベッドから「パートナー」という機械で移乗する。毛布で左右から下半身をつつめば終わり。簡単に言えばこうなる。いくつかの心理的抵抗をのりこえれば、これにまさる方法はない。

心理的抵抗といえば、戸外に出るのも最初は勇気がいった。はじめて外へ出たのは、退院して一カ月ほどの夜だった。しづる私を妻が「だいじょうぶよ」と強引にさそいだした。路地から公道へ出ると、帰宅するサラリーマンと出くわして、なんとなく気おくれがした。蒸し暑かったのをおぼえている。思えばあのころは妻もまだ元気があった。

私の退院後半年ほどで、妻が入院した。新緑の季節だった。

電動車椅子でひとりで出かけるようになったのは、そのころ
だっただろうか。

一年のうちもつとも外出しやすいのは、五月と十月。冷暖
房をつかわない季節と一致する。夏の暑さはどうにもならな
いが、冬の寒さは厚着をすればなんとかしのげる。東京では
真冬でも風のない日だまりなら二十度前後にはなるようだ。

寒さ対策はこうしている。股引（ももひき）を足の付け根
から下だけ切ったものを一年中はいているが、これはあるへ
ルパーが私のむきだしの足を見て「寒そう」といって考案し
てくれたものである。尻から上の部分は、つかわずに捨てて
しまう。褥瘡（じょくそう）予防と労力削減のため、下ばき
は着けないのである。さらに分厚いロングソックスとレッグ
ウォーマーをはく。親指の分かれたロングソックスは、洋服

屋へ行っても売ってない。釣具屋へ行けば手にはいる。何にしても、とにかく肌を締めつけるような物はいっさいいけない。鬱血（うつけつ）と褥瘡のもとである。

上も厚着をして、出発前にセルシンと鎮痛剤をあらかじめ飲んでおく。頸損になりたてのころはまだ首の筋肉がきたえられていないせいもあったのだろう、しばらく車椅子に乗ってゆられると、ベッドにもどってからひどい痙攣（けいれん）に苦しんだ。そんなときはセルシンと鎮痛剤を飲んで電気毛布や布団をいっぱい掛けて三時間ほどうなっているしかなかった。それなら最初から薬を飲んでしまえというところで、いまのやりかたにしたわけである。セルシンはもともと精神安定剤だが、痙攣止めにもなる。内科でも常備している薬である。

天気がいいとウズウズしてくる。散歩に行きたいのである。妻はベッドに横になったきり動かない。ウズウズが昂じてイライラしてくる。

ホーム・ヘルパーは台所と洗濯機のあいだを行ったり来たりしながらこちらの様子を気にしている。

「ご主人が車椅子に移りたがってらっしゃるのはわかっているですよ、私も。だけどそばに奥さんがいらっしゃるのに……」

あまりさしでがましいことをしてもいけないから自分も困っていると、妻がいないときに言われたことがある。

ついためいきともつめき声ともつかぬものが出てしまっつ。

「車椅子に乗りたいでしょ。背中が痛いんでしょ」「妻がいらだちと悲しみとやりきれなさをたたえた声で言いなが

らゆっくりと上半身を起こす。「あなたがなにを考えてるか、あたしは全部わかってるのよ。いまこうしてほしいんだろうな、ああしてほしいんだろうなって、いつも考えてるのよ。あたしだってしてあげたいわよ」

次第に鼻声になってくる。

私はあいづちをうちながら、ヘルパーに力を借りるべきかどうか迷っている。手伝ってもらったほうが妻の労力は少なくてすむのだが……。

ときには妻のほうから「子供を呼んで」と言うことがある。しかしまた呼ぼうとすると、呼ばなくてもいいといらだたしげな声を出すこともある。見きわめがむづかしい。「こじれたら最後、もうあたしはあなたにとって必要ない人間なのね」というところまでいってしまふ。いたわりの言葉が、かえっ

ていさかいの元になることもあるのだ。

よけいな波風を立てぬよう、なるべくだまっていることに
する。

トランスファーにしても、上半身・下半身の身づくろいに
しても、妻がいちばんうまい。迅速かつ丁寧である。ではそ
れをほめればいいかというと、ことはそれほど単純ではない。
嫌みにとられかねない。

「あたしがなんにもしないから怒ってるんでしょ」

「そんなことないって。何度も言ってるじゃないか。おま
えがなんにもしてくれないなんて、オレは思ってない」

「あなたがあたしにしてほしがつているということはわか
ってるのよ。摘便や入浴なんかあたしがしたほうがいいよね
え」

迎え袖で私にセーターを着せながら、もうすっかり涙声である。

「いやそれはそうだけど……でも無理してあれしてもなんだから……」

「お料理できないのがくやしい。最近ようやく大根や人参ならこわくなくなったけど、まだキャベツやレタスはだめね」

「大丈夫だよ。そこまで来たんだから、時間はかかるだろうけど、そのうちできるよつになるって」

「もうだめよ」

家庭の主婦が調子をくずして最初にできなくなるのは、料理である。料理は、味覚はもちろん視覚・嗅覚・触覚、そして栄養学などあらゆるセンスを必要とする総合芸術である。

それだけ大変なのである。

妻がおのれの変調を自覚したのは、台所でジャガイモの皮をむいているときだった。急に包丁がこわくなり、ジャガイモと包丁を流しにほうりだしたという。以来、しだいに料理が億劫になりはじめた。特にレタスやキャベツのように、一枚一枚むいて水洗いしなければならぬものは、店頭に並んでいるのを見るのも苦痛になっていった。

私は妻のぐあいがそれほど悪化しているとは気づかず、夜おそく帰宅して、子どもたちが夕食をすませてないことを聞き、「オレが帰るのを待ってたの？ 先に食べてていいんだよ」と言ったことが何度かある。

「あたしが台所の椅子にすわったままボーっとしていても、子供たちは、わかるのね、おなかがすいたって一言も言わな

いのよ。スナック菓子や牛乳で我慢してたわ」

後年、涙ながらに語った。

カットアウト・テーブルに車椅子をつっこんで上半身を前に倒し、積みあげた枕の上にひたいをのせる。目も枕にうずもれて何も見えなくなるが、背中が楽になって、安堵のためいきが出る。

「むかしは台所に立ってる時がいちばん幸せだった……」
粉薬の紙袋をやぶく音が聞こえる。妻は再び、けだるそうにベッドに横たわる。

「あたしにとってお肉や野菜は、単なるお肉や野菜じゃなかったの。なんだったかわかる？ 家族のよろこぶ顔だったのよ。お店で品物を見ると、あ、これをこついたらあなたや子供がよろこんでくれるだろうなって思ったわ」

「ロール白菜は……」うまかったよなと言いかけて、過去形にしてはいけないと気づき、あわてて「うん、なかなか独創的なアイデアで……」口ごもる。

「みんなあいつのせいよ！ あいつは人間じゃない。悪魔よ！」

妻が、突然怒鳴った。声の大きさに一瞬きもをひやす。それまでの会話とは脈絡のない、激しい叫びである。だが、何を意味しているかはすぐにわかった。何年にもわたって毎日のようにくりかえされてきた言葉なのだ。私に同意を求めていることも理解できるのだが、それに応えて逆に事態が悪化することを恐れる。私は、どっちつかずの曖昧なうめき声を出す以外のすべを知らない。それがまた妻をいらだたせることはわかっているのだが。

妻はCDウォークマンのイヤホンを耳にさしこみ、しばらく呪詛（じゆそ）と自虐の言葉を口にしていた。それがしだいに間遠になり、やがて寝息が聞こえはじめた。

「そうだ、ヒマワリの種買ってこなくちゃ」

私はさも急に思い出したかのようにヘルパーに声をかけ、マフラーとジャンパー、それにひざかけ、蓄尿袋カバー、靴、帽子で身なりをととのえたのち、右側のひじかけに「ツイン・サーモ・クロック」をとりつけた。気温と時刻が数秒おきに液晶表示されるもので、ひとりですり外出するときには重宝する。

車椅子の運転レバーが左側についているのは、私のばあい左腕から動きだしたからである。乗りはじめたころは、まだ



右腕には全然力がなかった。

最後に車椅子の背もたれについている安全ベルトを胸に
まわしたが、合わせ目のマジックテープが十分にかさならな
いほどセーターやジャンパーで着ぶくれしている。

玄関まで屋内に段差はない。外の階段わきに油圧式昇降機

が設置してある。油圧式というのがどついつことを意味するのか知らないが、電気じかけで、音はほとんどしない。

路地から公道へ出るとき五センチ下がる。この五センチがひどくあぶなっかしいので、特注の金属製スロープをつくって置いた。コンクリート製の十センチスロープなら駐車場の入り口には必ずといっていいほど置いてあつて珍しくないが、五センチの既製品はないのだそうだ。需要が少ないからだろう。

大通りに向かってしばらく行ったところで、保育園の散歩らしき子供たちと出会った。デイパックをしょった女性が、男の子と手をつなぎながら先導している。デイパックは、保母の必需品である。近づくと子供たちの中から、「なんにもしないのにづづいてる」という声があがった。手をつないで

いた子が「ぼくものりたい」と先生の顔を見あげたが、女性は無言のまま前を向いたつきりである。うなじがこわばっている。

大通りにつきあたった。車の流れがはげしい。店は通りをわたればすぐ左だが、あいにく交叉点が近くはない。

交叉点まで遠回りするのは気が重かった。波打つ歩道を車椅子で行くには、そうとうな腕前が必要なのである。車道に塗ってある横断歩道の白線ですら、わたろうとすれば車椅子がカクンカクンと揺れるほどの障害になる。

まずいことに、背もたれのロックがあまくて体がすこしうしろに倒れたのか　私の車椅子は脳貧血にそなえてリクライニングできるようになっていて、あるいは疲労で腕の筋肉がちぢんだのか、そのころになると運転レバーに手が

とどきにくくなっていた。指はまったく動かないから、レバーは棒状のものを握るのではなく、丁字型のものの上に手をのせるだけである。

車の流れを見はからって通りを横切り、店の前まで来た。車道と歩道のさかいに五センチの段差があるが、五センチぐらいならバックで乗り上げられないことはない。少々危険だが、思いきってやってみようと決意した。蛮勇が必要なときもある。はじめてひとりで外出したときも、なかば捨て鉢だった。

左手を丁字型レバーの上のせて引いた。乗り上げたときに体が前にかたむいた。あわてて停車した。しまったと思った。大通りと歩道の段差は二十センチ。二十センチの段差の乗り上げ口が五センチになっているということは、歩道は

十五センチ分ななめにえぐれているということだ。そんなことは承知の上だった。頭ではわかっていたが、腕が意のままにならなかった。前傾した体を元にもどす力は私にはない。腹筋も背筋もきかないのだ。

後車輪の片方だけ乗り上げたのか、車椅子も体も妙なくあいにかたむいた。運転レバーにふれると、ころげ落ちる危険がある。膀胱瘻のカテーテルを連結した蓄尿袋は車椅子に固定してあるから、もしころげ落ちたら腹からカテーテルがズボツと抜けるかもしれない。そうなったら救急車だ。

リクライニングしていればまだしも、前傾姿勢では大きな声は出ない。だれかがそばを通りかかるのをじっと待つしかない。背後に通行人の気配を感じて、「すいませーん」と声をかけたが通り過ぎてしまう。聞こえないのだろうか。関わ

り合いになりたくないのだろうか。あるいは、車椅子に乗っているのは足の悪いひとという先入観から、私がそんな危機におちいつているとは思わず、ただうなだれてひと休みしているようにしか見えないのかもしれない。体はジリジリと傾斜の度を深めてくるし、手をさしのべてくれるひとはいないしで、おそろしくもあり、はずかしくもあり、後悔と自嘲がまじって、最低の気分。息を殺して次の通行人を待った。

さいわい初老の紳士が気づいてくれた。体を起こし、安全ベルトを締めなおしてもらって、ようやく車椅子は歩道の上におちついた。すでにそこは目的の店の前である。ガラス戸が閉じていて中にひとの姿がなかったので、ついでに奥に声をかけてもらおうかとも思ったが、大変な難局から救い出してくれたひとにさらに用事をたのむのはなんだか図々しい

ような気がして、せつかくそのひとが「ほかにになにか」と言ってくれたのに、「いえ、もう大丈夫です」と気弱な笑顔でことわってしまった。

うつろ姿を見送りながら、ああ、たのめばよかったと悔やんだ。車は多くても人通りの少ない場所なのである。

ガラスの向こうに呼びかけてみる。なんの応答もない。

なにかもひとにたのまなければならぬなさに、ええいもう帰ってしまおうかと苛立ったが、ここまで来て目的を果たせないのもダラシない話だ、しばらく辛抱してみようと思いとどまった。

だれにでも声をかけられるというものではない。せかせかと忙しそうにしているひとにはたのみにくいし、あまりゆったりした高齢者だと用件が伝わりにくいことがある。若い女

性のばあいは、下心を勘ぐられやしないかと、つい余計な心配までしてしまふ。

まだ芽吹く気配を見せない街路樹の枝先が、風にふるえている。顔が寒い。歩道は家々の陰にある。温度計を見ると、七度だ。両手はなにも感じないが、きつと金氷（かなつこおり）に凍えているのだろう。

「毅然とした態度をとってほしい」と妻が言ったのを思い出す。「くずれたのはあたしよ。だけどあなたは、あたしが守ってって叫んでるのに、なにもしてくれなかった。なんにも解決してない。何が大事なのって聞いたら、あなた言ったわよね、全体がうまく行くことだって。そう、そうなの。あなたにはあたしや子供より全体のほうが大事なの。逃げ口上じゃない。優柔不断なのよ」

「優柔不断だからここまでもったということも言えるんじゃないの」「私がかろうじて絞り出した反論はこれだけだった。答えにも何にもなっていない。話をそらしているだけである。振り返れば恥の足跡。後悔ばかりである。」

店の中はすこしも飾りけがない。外の風景がガラスにうつって店内がよく見えないせいもあるが、土嚢（どこの）のよな袋がコンクリートの床に無造作に積んであるのが目立つくらいで、店というより倉庫のようだ。小売店ではないのかもしれない。

不意に奥から小さな子が顔をのぞかせた。ほほえんでみせると、ドアのほうへ寄ってきた。「一、二歳の男の子で、うれしそうに大人のサンダルを引きずっている。」

ドアの外へ出てはいけななしつけられているらしく、ガ

ラス越しに手ににぎったものを見せてくれた。何だかわからない。私は眉をあげて首をかしげた。男の子は笑顔で引き返し、棚のかけに向かって手の中のものを投げ、腰をかがめてなにかを拾い、ふたたび寄ってきて手をガラスに押しつけた。また首をかしげておどけてみせると、男の子はうれしそうに口をあけて笑った。いつも一人遊びをしているのだろう。

イナイナイバアをやってやればよろこぶだろうになあ
顔までとどかぬ我が手を見ながらそう思った。

五秒間ほどの青空（藤川景）

意志の 実現

選挙権を回復せよ

重度障害者になると、実質的に選挙権はうしなわれる。投票所に行けなくなるからである。権利というものは、行使できなければ、なきに等しい。

「選挙のお知らせ」という投票用紙の引換え券をかねたハガキは、送られてくるのだが、投票したくても、投票所への道のりを考えると、断念せざるを得ない。

一九八七年にけがをしてから投票できるようになるまで、七、八年かかった。その間幾度ハガキを捨てたことだろう。

もともと政治にはあまり関心がないほうだから、選挙がで
きなくても地団駄をふんでくやしがるということもなく、ま
自分の一票で当選者が変わるわけでもなかつと、ほうつて
おいた。毎日毎日、目の前にあらわれる難問に追われつづけ、
選挙どころではない。三十八歳で突然重度障害者になるとい
うことは、それまでに積み上げた人生をご破算にして、また
はじめからやりなおすということである。

ある選挙の投票日、ひとりりで近くの中学校へ投票に行った
妻は、帰ってくるなり私の枕もとにある電話の受話器をとり
あげ、区役所の選挙管理委員会を呼び出し、投票所の入り口
に階段があつて車椅子では入れない、いったい選管は障害者
のことをどう思っているのかと抗議した。私には相手の声は
聞こえないが、妻の声がしだいに荒々しくなつてくる様子で、

どつやらのらりくらしとした返答しかかえってこないらしいことがわかった。

「あんたねえ、自分だっという障害者になるかわからないのよ。明日はわが身だっということをおぼえときなさい！」
一喝して、ガシヤツと受話器を置いた。

数年後、妻はかかりつけの病院の看護婦から、郵便投票という手段のあることを聞きつけ、今度こそはと勢いこんで選管に電話した。ところがやはり埒（らち）があかない。郵便投票をするには、公職選挙法で定められたかくかくしかじかの条件を満たしていなければならないのだが、お宅のご主人はそれにあてはまらないからダメだという。

やっとみつけあてた一本の細い糸をにべもなく断ち切ら

れ、妻は激怒した。怒鳴りまくったあと、「あなたも言ってみなさいよ」と、電話を「マイク」にきりかえ、付属のマイクを寝ている私の胸の上に置いた。NTTのキュートスは、こつすると相手の声が電話器から聞こえ、私の声はマイクで相手に伝わる。

なんだか声が小さい上に早口でしゃべるからよく聞こえないのだが、とにかく公職選挙法施行令第五九条二によると、両上肢のつかえない者は適用外だというのである。

「では私はどうすればいいんですか」

「投票日の前に区役所へ行って不在者投票をしていただくということも考えられるかと思いますが」

近所の中学まで行けないものを、どうやって遠方の区役所まで行けというのか。車椅子ごと乗り込めるハンディキャブ

を頼んで、介助の人手を確保すれば、なんとかならぬこともないが、おおごとである。そこまでする気力も体力もない。

「郵便投票ができないなら、選管のかたにうちまで来ていただいて在宅投票するというのはどうですか」

「そういうことは都会ならできるかもしれませんが、となりの家に行くのに山ひとつ越えなければならぬ地域もありますから……」

「ここは東京のと真ん中だ。それに投票するのに山ひとつ越えなければならぬような土地こそ、選管がおもむくべきではないのか。郵便配達をみならいなさい。」

いろいろ言ってみても、「選管は現行法の枠内で公正な選挙の実現を期する」の一点張りで耳を貸そうとしない。これだけ言ってもダメなら、もうしようがないかなかなかばあきら

め、冗談半分に、

「そうですね、どうにもなりませんか。でもこの選挙のハガキがもつたいたいなあ。じゃあ同じ候補者を推す人になげちゃおうかな」

と言ったところ、それまで抑揚のない合成音のようだった声が、いきなり動揺した。

「ッそれは違法行為です。選挙違反になります」

お、いけるかもしれない。

「でも投票所でハガキをわたして投票用紙をもらうとき、ハガキを持ってきたのが本人かどうか確かめてはいないでしよう」

「……………」

「それにこないだ、聖心女子大の女子学生たちが集団で選

拳八ガキを売ったっていうこともありましたよね」

「ですからそれは法に反する行為です」

「もちろん選挙の八ガキを売るなんてけしからんことです。ですが選挙があるたびに選管は棄権防止を呼びかけてらっしゃるでしょう。私は私の一票をむだにしないようにするには、信頼できる友人にでも託すしかないじゃありませんか」

というようなやりとりをしばらくしたあと、

「私は手では書けません、口で書けます。それなら何も問題はないでしょう。公職選挙法の精神に反するものではないでしょう。郵便投票ができるようにどうにかひとつよろしくおねがいしますよ」

選管はその場ではウンと言わなかったが、つぎの選挙がお

こなわれる前に郵便投票証明書を送ってきた。

私はこのようにして選挙権を回復した。だが、事は私一人にとどまる問題ではない。郵便投票というものがあることすら知らないひとが多いのである。

高齢者層の増加にともなって今後ますます在宅障害者はふえてゆくだろう。一九九一年の時点ですでに在宅身体障害者二百七万人のうちほぼ半数が六十五歳以上なのである。このひとたちが投票所に行くことは、まずないだろう。行きたくても行けないにちがいない。

選挙がおわるたびに「投票率が下がった、投票率が下がった」と報道される。原因は国民の政治に対する無関心だといわれているが、投票したくてもできないひとの増加も関係し

ているのではないか。投票率は、若者層より高齢者層のほうがいいと高い。

プライバシー保護の問題などいろいろ考えてみたが、やはり選管の訪問による在宅投票が一番いいだろうと思い、もう一度、区の選管に電話した。相手は、初めての声である。

藤川　もしもし、私は藤川と申しますが、ええとね、障害者の投票についておうかがいしたいんですが、お時間よろしいですか？

選管　大丈夫です、どうぞ。

藤川　車椅子で投票所に行くばあい、会場となる小学校や中学校の体育館に入れないケースが多いと思うんですよ、階段があつてね。

選管 そついつばあいもございます。

藤川 そついつときはどついつぶつた……。……。

選管 基本的にはですね、スロープを設置するんですよ。そしてスロープのつけられない階段も中にはあります。そうしたばあいは職員の者が段差をもちあげてはいつていた
だくという……。……。

藤川 ああ、かつぎあげるといふことですか？

選管 そうです。

藤川 百何十キロにもなりますけれども。

選管 すべての投票所というわけにはいかないんですが……
… 職員の者がかついで、重すぎて投票所にはいれなかった
といふことは聞いたことがございませせんが。

藤川 そうですか。電動車椅子となると、七、八十キロあつ

て、その上に六、七十キロの人が乗ると、百三、四十キロになるんですけど、大丈夫なんですか？

選管 あのですね、具体的に重すぎて上げられなかったという話はずかがってないんですよ。

藤川 それはおそらくはいれないということをお本人がわかっていて、行かないんだと思うんですけど。かついでもらうのも恐縮なんですよ。スロープがあれば解決すると思うんですが、さきほどおっしゃったスロープというのは選管が各投票所に用意するんですか？

選管 そなえつけのスロープがないところもございます。

藤川 それは選管が用意するんですか？

選管 そうです。

藤川 わが区には何力所くらい投票所があるんでしょうか。

選管 六十五カ所です。

藤川 そのうち何カ所くらいスロープの必要な場所が？

選管 少々お待ちください。……もしもし、今回の選挙で特

別にスロープを設けた場所は十三カ所ございますね。

藤川 ということは、あとは？

選管 あとはですね、設備がもともとあるということですね。

藤川 体育館にスロープではいれるということですか？

選管 そうですね、基本的には。

藤川 そうですか。そういう体育館は私はほとんど見たこと

がないですけどね。……あの、車椅子のばあいはね、投票

所にとどりつくまでの問題がありましたね。雨がふると投

票に行けないんです。

選管 ああ、そうですね。校庭を通れないということですよ

か？

藤川 校庭？ いやいやあのね、まず家から出られないという
ことですよ。

選管 はあ。

藤川 雨がふっても傘をさせないでしょ、車椅子のひとは。
そういうとき、どうしたらいいというふうに……。

選管 こちらは選挙管理委員会でございます、ご自宅のほ
うにお迎えに行くということになりますと、利益のフトウ
ヨ（不等与？）という問題が出てくるかと思うんですけれ
ども。特定の障害者のかただけに便宜をはかるということ
になってしまいます。私どもとしましては、投票所にお越
しのかたに対応したいということになります。

藤川 しかし、実際に雨がふれば棄権という可能性が高いと

思うんです。選挙の時には、選挙管理委員会の広報車とかテレビ等で「投票に行きましょう。棄権をしないように」とさかんに呼びかけがおこなわれますでしょう。行きたくても行けないひとはどうすればいいのか。物理的に投票したいのにできないという、そういうひとのために対策を講じる必要があるのではないかと思うんですが。

選管 それは、……（聴取不能）

藤川 あの、郵便投票という方法がありますよね。

選管 ございますね。これについては、障害者手帳の級がございませぬ。一級、二級という等級に定められたかたが郵便投票の対象になるのであって、障害者すべてのかたが郵便投票できるといっわけではないんですよ。

藤川 それで、障害者手帳で、一級もしくは二級を持ってい

て、どこがどうであればいいというわけなんですか？

選管 該当するかということですね。少々お待ちください。

……もしもし、お待たせしました。それでは申しあげます。

両下肢、体幹、心臓、じん臓、呼吸器、ぼうこう若しくは直腸若しくは小腸の障害若しくは移動機能の障害（以下この条において「両下肢等の障害」という。）の程度が、両下肢若しくは体幹の障害若しくは移動機能の障害にあつては一級若しくは二級、心臓、じん臓、呼吸器、ぼうこう若しくは直腸若しくは小腸の障害（次号において「内臓機能の障害」という。）にあつては一級若しくは二級である者として記載されている者、それらのかたがたが該当するわけなんですけれども。障害を複合的にお持ちで、これらの障害に当たらなくとも、それらに相当すると認めるかた

については、特例的に適用される時があるんですよ。

藤川 誰が認めるんですか？

選管 東京都知事です。

藤川 知事が認めるんですか……。それであの、頭ははつきりしているけれども……。

選管 頭がはつきりしている？

藤川 つまり正常だということですよ。ぼけてないとかね。

選管 一応ですね。この郵便投票という制度を利用できるかたというのは、自分で字が書けるかたという条件があるんです。障害などの状況によって、字が書けないかたがいらっしゃいますね、そういうかたは利用できないんですよ。

藤川 それはなぜですか。

選管 法律なんですよ。郵便投票の義務ということなので、

法律で決まっているんですよ。おそらく意味としては「投票の偽造をふせぐ」ためではないかと思われれます。

藤川 そうすると、郵便投票する場合、それが本人が書いたかどうかというのは、どうやって確認するんですか。

選管 はい、本人がお書きになったというような状況でやっていただいております。本人がおいでにならないというケースや、自分で書けないというかたについてはですね……。

藤川 いやいや、自分で字が書けるにしても。今、字が書けないひとは除外されるという理由として、「投票の偽造をふせぐ」とおっしゃったでしょ。では郵便投票で字が書けると認められているひとが郵便投票したとして、それが本人が書いたかどうかはどうやって見分けるんですか？

選管 いや、それはですね。見分ける方法というのはないの

ですけれども、私が申し上げたのは、こういうことなんですよ。あの、代理投票というのはご存じですか、制度として。

藤川 代理投票というと、投票所に行つて係りのひとに書いてもらつていじ……。

選管 手続きとしましては字がお書きになれないというかたが、口でおっしゃいますよね。「誰々さんをお願いします」と。そうして確かに代筆する者がそのひとの名前を書いたということ、他の者が見るわけなんですよ。確かに選挙人のかたがおっしゃった名前を投票用紙に書いたかどうかを、こちらの者が確認します。

藤川 はいはい。

選管 ですけれども郵便投票のばあい、そういった代筆を

頼みますと、選挙人のかたの意志が投票用紙に表わされていない可能性があると、という意味で私が申しあげたんです。偽造の疑いがあるというようなことを申しあげたんです。

藤川 はい……？ だから、その、下肢であるとか、体幹であるとかね、あるいは心臓腎臓等の一、二級、もしくはそれの複合したもので、知事が認めたひとはそれ以外の等級でも郵便投票ができるわけでしょう？ だけど、自分で書けないひとは認められないと。自分で書けないひとは認められないのは、偽造をふせぐためだと。

選管 と、私どもは考えております。

藤川 いや、そのとおりだと思いますが。でも、郵便投票をしているひとがね、それが本人が書いたかどうかを確認する方法は……。

選管 ございませぬね。

藤川 ないわけでしょう。だったら、その、頭ははっきりしているけれども、たとえば両手両足がないとかね、そういうひとだってあり得るわけじゃないですか。

選管 そういったかたはですね、郵便投票の制度はご利用できませんよ。

藤川 うん？ だから、そういうひとは選挙に行けないじゃないですか。だって頭ははっきりしていて自分の意志で誰々さんと言うことができるんだけど、ただど手足が使えないから、投票所に行くことも郵便投票することもできないっていうんじゃない……。足が悪いということでも郵便投票の権利を獲得しても、本人が書いたと称して、ほかのひとが、家族あるいはよからぬ人物がですね、勝手に書いて

投票してしまうということもありうるわけでしょう？

選管 そういったかたは、そもそも郵便投票の制度を利用できないうちです。

藤川 ええ？ だって、該当する等級にあれば申し込むことができて、郵便投票できるわけでしょう？

選管 実際にはできるかどうかということをし、こちらのほうで確認するかたちになっているんですけどねえ。

藤川 そんなことないじゃないですか。それはもちろんね、障害者手帳を持っていて、下肢、体幹、あるいは内臓などの機能がだめで、自書できるということであれば、郵便投票の権利はあるわけでしょう？

選管 当然ございますねえ。

藤川 だから、そういうひとができるんだったら、それは、

郵便投票を現在認められているひとのね、投票が偽造でないかどうかということを確認するすべはないわけでしょう？

選管 ……（聴取不能）

藤川 こないだもね、朝日新聞の「論壇」に門野晴子っていうかたが公選法五九条の二に「在宅寝たきり者」を加えるべきだと、自分の母親を例にして書いていらっしやいますよね。それと以前、朝日の西部版、これは九二年七月の話ですけど、ALSの高井さんというかたがね、大きくとりあげられていましたけれども、その後、なんの手だても講じられていないという話なんですよね。ALSってご存じですか？

選管 ……存じてません。

藤川 あのと、筋萎縮性側索硬化症という、まあ、頭ははつきりしているんです。ただ体の自由がきかないということですね。そういうひとは投票所に行くことができないんですよ。

選管 ……………。

藤川 あのー、投票所に行きますとね、投票箱の前にずらーっと並んでらっしゃいますよね、ひとが。

選管 ひとが……、はい。

藤川 あれはどういうひとが並んでいるんですか？

選管 投票立会い人のかたちです。

藤川 立会い人というのは、選挙管理委員会のかたなんですか？

選管 いや、選挙管理委員会がですね、投票立会い人ということでは、信任する場合がございますけれども。

藤川 選挙管理委員はいらっしゃるんですか。

選管 通常、うちのほうで立会い人をするということはいまありませんけれども。

藤川 立会い人をするのではない？ じゃあ、字を書けないひとが、代筆を頼むのは、誰に頼むんですか？

選管 投票所に職員がおりまして。

藤川 職員というのは、誰ですか？

選管 職員というのは、区の職員で、投票に関して、選挙管理委員会のほうから委嘱（いしょく）している者なんです。

藤川 ああ、なるほどなるほど。区の職員のかたが、要するに最低二人はいらっしゃるということになるわけですね？

選管 いえ、投票所にはいろいろ係がございまして、各投票

所で職員の数は一十人を下ることはないと思いますよ。

藤川 ああ、十人はいらっしやると。投票箱の前に並んでい
るひとは全部、区の職員ということになるんですか？

選管 立会い人は、区の職員ではございません。

藤川 ああ、じゃあ立会い人のほかに区の職員のかたが……。

選管 十名ほどおりますね。

藤川 ああそうですか。たとえば有権者がハガキをわたした
ときに名簿をチェックするひとなんかがそうなんですか
ね。

選管 そうですね。

藤川 そうですか。十人もいらっしやるんですか。それで、
その一人が書いて、もう一人がちゃんと選挙人の言ったと
おり書いたかどうかを確認する、と。それをですね、外出

の困難な障害者で郵便投票も認められてないっていうひ
ところのところに来てもらつわけにはいかないんですか？

選管 それはですね、法律で認められておりませんので、で
きないんです。

藤川 選挙管理委員、もしくは選挙管理委員会が委嘱した区
の職員が、障害者のところへ行ってですね、あの一、二人
いればいいわけでしょう？ 一人が書いて、もう一人が確
認すればいいわけでしょう？

選管 はい、しかしそれは投票所の話です。

藤川 うん、だから郵便投票が認められていないひともいる
からっていうことを申しあげているんですよ。

選管 いや、郵便投票の資格のないかたの自宅に行って、代
理人立会いで投票するということとは認められてないんで

すよ。

藤川 うん、だけどね、これからますます老人が増えていくわけでしょう。すると、郵便投票に該当しないひととも増えてくるんじゃないでしょうか。

選管 可能性はございますね。あくまでもですね、選挙管理委員会というのはですね、公選法に則って仕事をしなければならいんですよ。公選法で認められていないことは仮に住民のかたの要望があっても、いたしかねますんですけども。実際、法律のほつがですね、変わらない限りできないんですよ。

藤川 うーん、そうですね。……あの一、六十五とおっしゃいましたっけ、わが区の投票所。

選管 はい。

藤川 では一つの投票所には、何人くらいの有権者がいるものなんでしょうか。

選管 区全体で四十二万人ほどでございますから、六千四百人ほどですけれども。

藤川 この中で、投票所に行けない、つまり車椅子の人間なんてのは、そう数いるもんじゃないと思うんですけれども、これから増えるかもしれないけれども。そうするとそれは一日でもまわりきれぬ数だし、事前に投票するという方法を採用すればですね、なにも投票日に限ってやる必要もないわけでしょう。

選管 必要がないというのも、法律の改正が必要なんですけれどもね。

藤川 うーん、十人いるとすれば、物理的には可能なんじゃ

ないでしょうか。

選管 物理的に可能であっても、法律的に不可能でござい
ます。

藤川 はいはい。現行法ではね。それはまあわかるんですが。
ただ在宅投票制度というのが一九四七年にできましたよ
ね。

選管 変わりましたね、制度が。

藤川 はい、一九四七年に施行された地方自治法で採用され
て、五〇年施行の公職選挙法にひきつがれたけれども、五
二年に廃止されたと。高井さんを取りあげた朝日の記事を
読むと、「疾病、負傷、妊娠、もしくは不具のため、また
は産褥（さんじょく）にあつて歩行が著しく困難な者」に
ついて、郵便投票と、同居の親族による投票用紙の代理請

求と投票とを認め、対象は二百万人から四百万人に上っていた。ところが、親族や選挙運動員が悪用するなどの違反が続出したことから、五二年廃止された。まあ変わることもあるわけですよね、法律って。

選管 変わる可能性もございます。

藤川 それをね、変えんとすれば、誰に働きかければいいんですか。

選管 法律を決めるのは、国会なんですけれども。

藤川 国会？

選管 国会のほうで決めるはずですけども……。

藤川 うーん。だけど国会に働きかけるっていつてもなあ。

選管 ちょっとむずかしいかもしれませんがそれでも。

藤川 うーん、国会に働きかけるってたって、そんな簡単には

いきませんよね。「進め！電波少年」じゃないんだから、そんなにいきなり行ったってねえ。どこへ行ったらいいかもわからないし。国会議員の知り合いなんていないし。では普通のひとが誰に働きかけたらいいかと考えたばあい、役所で選挙のことを扱っている係りといったら、選管しか思い浮かばないんです。下水道課にかけてもしかたがないでしょ。それは、僕は選挙管理委員会が下から積み上げていくしかないんじゃないかと思うんですけれどねえ。

選管 あの、実はですね、たとえばこの前の選挙の時にですね、地方選挙、ございましたね。

藤川 あの、都知事選のことですか。

選管 そうです。それが終わった時にですね、東京都の選管から私ども区の選管に対して、何か住民のかたの要望であ

るとか、法改正の余地はございませんかという問い合わせがくるんですけれども。今回はですね、残念ながら私どものほうで出したものの中にはなかったように思うんですけども。まあつまり、東京都の選管に働きかけるといって可能性はございます。

藤川 そうなんですか。こないだ都知事選のほかに区長選と区議選がありましたね。その区議選については、別に都の選管がどうのということはないんですか。

選管 いや、都の選管がやっております。

藤川 あ、区議選についても。ああそうなんですか。選挙のたびにそのあといわばこの、住民の声を聞くというふうな……。

選管 ある程度はできると思いますね。

藤川 そうですか。しかしそのー、いま言ったような問題がですね、現にこれまでに何度かマスコミでも取り上げられているにもかかわらず……。

選管 さきほどのお話にありましたけれども、清水の高井さん。

藤川 ああご覧になりました、あの記事。さすが選管ですね。

選管 あのかたはワープロでお書きになれるんですね。

藤川 そうそう。そのひとが言うには、この選挙法がね、公職選挙法が始まったころには、ワープロなんかなかった。つまりワープロを念頭において作られた法律ではないわけですね。

選管 そうですね。

藤川 また郵便投票をワープロでやればやったで、これは誰

が打ったワープロかわからないと言われかねないでしょう。
う。

選管 ……………。

藤川 そうすると、また最初の疑問にもどっちゃうんですけれども、郵便投票したひとの書いたものは、本人が書いたものかどうか見きわめる方法はないではないかと、そう思うんですよね。選挙の公正を期するという意味においては、現在の方法よりもね、むしろ選管もしくは選管に委嘱された区の職員が、直接当人からとったほうがずっと公正が期せるんじゃないでしょうか。

選管 私自身の意見を申し上げてもしよつがないんですけれども…………。

藤川 いやいや、そんなことないです。

選管　いまの例では、たしかにそのほうが、選管が立ち会って選挙人の前で係りの者が代理で書いたほうが……。

藤川　そうでしょう。手間がかかるかもしれないけど、なにも投票日にまわらなければいけないということもないと思っんですよ。不在者投票も郵便投票も事前にやるわけですから。

選管　そうでございます。

藤川　最後まで封筒は開けられないようにしてね。だからそういう投票方法をとれば、投票日前にまわるということだって可能なわけでしょう。

選管　はい、それは法律を改正すれば可能でございます。

藤川　うーん、そういう方法がいいと思っんですけどねえ。

選管　私も個人的には非常にいい方法だと思いますよ。

藤川　そうですね（笑）。わかりました。ぜひ次回の機会がありましたら、そのようにご提案いただくようお願いいたします。

この電話のあと、七月二十三日（日）に参議院議員選挙があった。ほんとうに投票所にはいれるのかどうか、身をもつて確認してやろうと、まなじりを決してその日を待ちかまえていた。梅雨のあいだは比較的すずしく、雨さえふらなければ頸髄損傷者にはしのぎやすい季節である。

ところが、投票日の朝、いやな気配を感じて障子をあけてもらうと、前日までとは違って変わってキラキラとかがやく屋根瓦や空が、目に飛び込んできた。一九九五年の夏は、キツパリとやって来た。その強烈な日ざしを見たたん、ヘナ

へナと腰がぐだけた。頸損は雨にも弱いが、夏の日ざしにはもつと弱いのである。

【郵便投票の手順】

まず郵便投票証明書の発行を選挙管理委員会に申し込む。めんどろなのはこれだけで、証明書さえ獲得すれば、あとは選挙のたびに選管から必要な書類を送ってくる。証明書は四年間有効。

もうすこしくわしく言えばこうなる。

選挙が始まると、投票用紙と投票用封筒の「請求書」が送られてくる。請求書といっても、なにもとられない。選管に対する請求書である。それに署名・捺印して、証明書を同封のうえ送り返す。

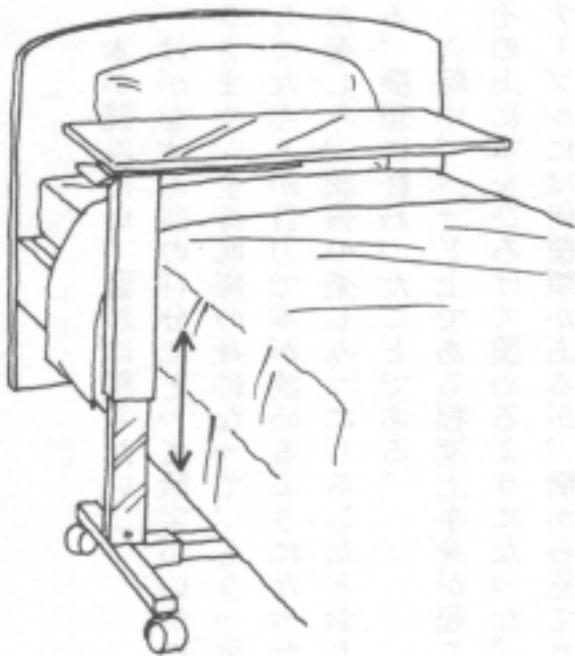
投票用紙と内封筒と外封筒が、送られてくる。投票用紙に候補者名を書き、内封筒に入れる。それを外封筒（「郵便による不在者投票用外封筒」）に入れ、上に署名する。返送用封筒に入れて送り返す。証明書は、また使うからとっておく。以上。

自分の名前と候補者名は、自筆でなければならぬが、口で書こうと足で書こうとかまわぬ。私が「前例」である。体が不自由で投票所に行けないために棄権しているひとは、なんとかこの方法で選挙してほしい。腕をこまぬいてると、弱者は切り捨てられかねない。票にらんような者のことを、政治家が真剣に考えるとと思うか。

究極のページめぐり

本が読みたい。猛烈に読みたい。

けがをする前の自分にとって活字がいかに重要なものであったか、その活字漬けの日々のありさまや、全身麻痺の身になって、もう一生本は読めないという絶望感におそわれたこと、そしてなんとか自力で本が読めるようになったいきさつなどについては、前作の中の「あんパンの楽しみ、読書の楽しみ」にしろしたとおりだが、じつはあの時点では書けなかったこともある。夢想到終わったことである。



ベッドサイド・テーブル：高さが調節できる

入院中、ベッド上である程度上半身が起こせるようになる
と、ベッドにテーブルをさしこみ、その上に本をひろげて読
めるようになった。ページはめくってもらっているのである（ベッ
ドで使うテーブルには何種類があるが、横から見てカタカナ
のコの字形をしているベッドサイド・テーブルがなにかと便
利なようだ。コの字の上の横線がテーブル状の板で、縦の線

が柱、下の横線はキ
ヤスターのついた
土台である）。

自力では読めな
くても、ひとにめく
ってもらえば読め
ないことはない

わかって、退院後のおのれの姿を夢想した……。私はベッド上で上半身を起こし、本を読んでいる。妻がかたわらの椅子にすわって編み物をしている。私が「ん」と声をかけると、立ち上がって一枚ページをめくり、ふたたび編み物をつづける妻。ときどき紅茶などをいれて飲ませてくれる。かるやかなモータールトをちいさめにながすのもいいだろう。このようにして、不自由ながらも静かな午後がすぎてゆくことを夢想していたのである。

あまかった。静かにすぎてゆく午後など、かぞえるほどしかなかった。

なにかをしたいという意欲は、体の苦しさに圧倒され、ほとんど湧かなかった。それでも本だけは読みたいと思った。しかも極力ひとの手をわずらわせずにである。なにかしたい

と思えば妻の手をわずらわせることになる。妻は必要最小限の介護で手一杯だった。

しかし私の遠慮がまた、妻を苦しめることになった。

「あたしがだらしないから、あなたに好きな本も読ませてあげられない」と、おのれを責めた。「あなたは、会社から帰ってきたらもうそのままごろごろテレビを見てるっていうひとじゃなかったものね」

「いや、テレビもなかなかおもしろいよ」

妻は私が遠慮しているのではないかと気に病んだが、私は私で妻が気に病んでいることは分かっている。つらそうな様子を目にすれば頼めない。

私の心は、萎縮に萎縮をかさねた。全身麻痺になった瞬間から、もはや対等な夫婦関係ではなくなっていた。私はそう

思っていた。ひがみだろうか。妻は世話をする立場で、私はされる立ち場である。せめて妻の心の支えになることで夫の役割をはたそうとはしたが、力がおよばなかった。妻の心は、もはや何をもつてしても癒されることはなかった。

生活の激変にとまどっていたのは、二人とも同じことである。私はつごかなくなった体にまだなれていなかったし、妻は私がつごけなくなったという現実を容認できなかった。

「つごいて、つごいてよ！」

私の体をゆさぶりながら泣きじゃくるのである。

はじめのうちはあれこれとなくさめていた私も、毎日のようにくりかえされる愁嘆に次第にやりきれなくなり、ある日、心の樽からなにかがあふれだすのを感じた。ああ、限度を超えたなと思った。

「そんなことを言うなら、おまえがうごかしてみろ！」
怒鳴りかえした。妻は玄関のドアに体当たりして、夜の中
に裸足で飛び出していった。いま思い返しても気の重くなる
歲月である。

欲望をいだくべきか、おさえるべきか、それは大問題であ
る。欲望をいだかなければ、成就のよろこびはない。欲望こ
そ進化発展の根源である。だが、欲望にはきりがない。どこ
かで欲望と抑制との折合いを見つけなければならぬ。どこで
つけばいいのだろう……。

もうひとつ、入院中に考えていたことがあった。こちらは
一応実現したのだから、あながち夢想とは言えない。新聞を
読む工夫である。カットアウト・テーブル（えぐれ机）を作



カットアウト・テーブル：天板を新聞2ページ分の大きさにした

るにあたり、国リハに出入りしていた福祉用具製作業者に新聞二ページ分の大きさになるよう注文した。天板を、手前のえぐれた部分と新聞をのせる部分との二つに分け、両者をちようつがいできなく。手前の板はテーブルの足に固定されていて動かないが、新聞をのせるところは八十年代ほど跳ね上がるようにした。天板中央に新聞を固定するための針金がわたしてあり、中央ページ、すなわち三十二ページだてなら十六・十七ページをはさんでおく。

かくして車椅子にすわった私の目の前にはじめて新聞が

立ち上がったときは、実用新案特許を申請したいくらいの気分になった。

ページは、口にくわえたマウススティックでめくる。このマウススティックこそ、四肢体幹麻痺の身にとって欠くべからざる道具なのである（マウススティックは“mouthstick”なのか“mouth stick”なのか、てもとの『ランダムハウス』にはどちらも載ってない。新語なのだろう。マウスピースは“mouthpiece”と一単語になっているから、マウススティックも一単語と類推しておく）。

最初のマウススティックは、入院中国リハのOT（作業療法士）に作ってもらった。院内の歯科で歯型をとり、なにか白い合成樹脂でマウスピースを作り、それを鉛筆ホルダー（短くなった鉛筆をつかうための金属製のもの）に固定、鉛

筆ホルダーにはお菜箸をさしこみ、先端に小さいゴムチューブを付けた。お菜箸に特別の意味はない。長さとおさが適していればなんでもいい。

新聞の四隅は遠くて読みにくいものの、ゴムチューブの適度な摩擦の力を利用してなんとか自力で三十二ページすべてを読むことができた。

だが、退院後じきにこれもあきらめざるをえなくなった。えぐれ机には腕の運動を助ける器械スプリング・バランスサーがとりつけてあったし、不要になったフローテーション・マットなどいろいろなものがのせてあった。

フローテーション・マットというのは、褥瘡（じょくそう）を予防するための製品で、主に車椅子にすわるとき、尻の下に敷いて使う石油製品。ほかに「ローホー・クッション」と

いう一種のエア・マットがあり、頸損のベテランからそれを勧められて購入してからは、いままで使っていたフローテーション・マットが不要になってしまったのである。一個数万円するものだから簡単には捨てられない。福祉機器は何でも高く、ちなみに「ローホー」は私が買った一九八八年には六万円した。六万円の座布団である。

新聞を読むためには、これらのものをすべてどかさなければならぬ。石油製品のフローテーション・マットは、小さなめの座布団ぐらいの大きさがあり、こんやくマットという通称がおかしいくらい適切なブヨブヨして重たいものである。これらをどかしたうえで新聞をセットするのは、女の力では無理のように思えた。やってできないことではないが、気が引けて頼めない。

退院後、「リーディングスタンド」というものも、通信販売で買ってみた。寝たまま読める書見台である。書見台に支柱がついており、支柱をささえる板状の土台は、枕の下にさしこむ。値のはるものだけあって、あらゆる部分の角度が調節可能なように設計されており、なかなかよくできている。小さな蛍光灯までついている。

本はページの中ほどを書見台の中央にひもで固定し、下から見上げて落ちてもこないようになっている。ところが本の四隅はクリップで止めてあるから、ページをめくるには、片手でクリップをつまみ、片手で本を押さえなければならぬ。

よしんばそれを器用に片手でこなせるとしても、とにかく両手の動かない私には使えない。

小学生の子供にめくらさせたこともあったが、ひとの読んでいる本をめくるのは、そうとうな根気を要する仕事のようで、二、三枚めくると、もうすっかり飽きてしまい、あとがつつかなかった。

この書見台は、たちまち物置きへ行ってしまった。

入院中から電動式のページめくり機があるという話は聞いていた。なんでも四、五十万するらしく、さすがに物のそろった国リハのOT室にも現物は置いてなかった。

簡単なスイッチ操作でうごくページめくり機はないものかと、誰彼となくたずねまわっているうちに、(株)ナムコが電動ページめくり機を売り出したという話を聞きつけた。十五

万円だという。高いといえばやたら高いが、従来のものにくらべれば格段に安くなっている。

ナムコの福祉機器相談室に電話する。さっそくお持ちしますと営業マンは言った。ご親切はありがたいが、持ってこられたら、きつと買わなければならないような雰囲気になるにちがいないと、おのれの性格を勘案し、とりあえずパンフレットを送ってもらうことにした。

自動ページめくり機リーディングエイド 見れば、たし

かに操作は簡単なようだ。「特殊粘着テープを利用して、ひとつのセンサ入力で操作できる」「文庫本からB5版の週刊誌が使用可能」と謳い文句にある。版の字がまちがっているが、まあそれはよろしい。しかし、いかんせん大きすぎる。ただたんでも幅が八十センチ、奥行きが三、四十センチ。重量

も五キロある。これではかたづけられるのも出してくるのもえらいことで、たのむたびに気兼ねを強いられることになるだろう。読書専用の机でもないかぎりむづかしい。

しかし、この機械の写真を見て、あることを思いついた。ロール本構想である。私がサラリーマンになった昭和四十年代後半、コピー機の紙は、判別型でなく、たしかロール状だった。紙の大きさは、オリジナルの大きさに合わせて、つまりで調節するしくみになっていたように記憶する。あのてのコピー機で、紙を裁断せずに本をどんどんコピーしてゆけば、トレットペーパーのようなロール本ができるはずだ。

それをモーターじかけの読書機の左の棒にさしこみ、右の棒で巻きとらせる。カメラのフィルムを巻く要領である。横組みの左開きの本は、逆にセットすればいい。スイッチは、

右巻き本用と左巻き本用の二つが必要になるが、これがかえって前のほうを読み返す際の逆まわしスイッチの役割も果たす。

これだ！ これなら体のどこかでスイッチにふれれば、ページは苦もなく進んでゆく。

おお、なんて頭がいいんでしょう。この読書機が成功すれば毎年特許料がガツポガツポだなあ、もう将来の家計は心配ない。本が読めなくて悔しい思いをしている障害者諸君、待っておれ、鞍馬天狗のおじさんはいますぐ駆けつけるぞ！

なんだか浮き浮きしてきた。全身麻痺になってしまった今、動かせるのは首から上だけである。聾啞（ろうあ）者や盲人、あるいは下半身麻痺なら、不自由ながらも働くことはできる。稼ぐことができる。社会に出ることができる。だが、全身麻

痺の身で何ができるだろう。首から上だけで勝負するしかないではないか。アイデアひとつで収入が得られれば、これに勝るものはない。しかも重度障害者のお役に立てるのだ。

入院中には、こんなことも考えついた。よるとさわると競馬の話をしている患者たちを見て、世の中にはずいぶん競馬好きのひとが多いのだということにおどろいて思いついたことである。話を聞いていると、馬券を買うのに苦労している様子である。女性客の掘り起こしに成功した競馬業界は、いまや空前の儲けぶりだという。それなら、馬券をもっと手軽に買えるようにすれば、たとえば主要な駅の一角に馬券売り場を設置すれば、そしてそこに障害者を雇用すれば、売上げは一気にはねあがり、同時に障害者の働きぐちも

飛躍的に増大するのではないだろうか。

現在、わが国では身体障害者の雇用水準を引き上げるため、常用労働者六三人以上の企業は一・六パーセントの障害者を雇わなければならないことになっている。「障害者の雇用の促進等に関する法律」で定められているのだが、企業の約半分は未達成である。労働者三〇〇人以上の企業は、それを達成できないばあい、障害者一人あたり月五万円の「身体障害者雇用納付金」という名の罰金を払わなければならない。それでも、障害者を雇うくらいなら罰金を払ったほうがましなのだろう。

馬券売り場を主要駅に設置すれば、もう一つの大問題、交通バリアも解消にむかってゆくのではないだろうか。車椅子のひとを雇うからには、どうしても電車が利用できるよう駅

の階段というバリアを解消せざるを得ない。主要駅のバリアがかたづいたら、つぎはすべての駅、そしてバスへと安楽交通の輪はひろがってゆくにちがいない。

馬券販売障害者優先法でもつくらないかぎり、障害者雇用の問題も交通バリアの問題も解決しないと思う。百年河清（かせい）を俟（ま）つにひとしい。

しかし……指一本うごかない私は、馬券売り場の窓口にすることもできないだろう。たとえすわれたにしても、競馬には興味がないから、私自身は馬券売りになりたいわけではない。ただ、あまりにも競馬好きが多いのを見て、それならこうしてはどうかという案を出してみたのである。競馬は一例に過ぎない。

さて、ページめくり機の話である。自分の考えた器械を誰かに作ってもらわなければならない。さいわい私の環境制御装置を作ってくれた南浩一さんを知っている。南さんは、エンジンつきのハンググライダーにのって空を飛んでいるときに墜落して頸損になったひとだが、私より状態は良く、足をつかわない改良自動車を運転してどこへでも行く技術者である。福祉機器やコンピュータにかけてはとても詳しい。電話でアイデアを話すと、

「なるほど、それならできそうですね。考えてみます」という返事だったが、いつこつに音沙汰がない。頸損は電話一本でもなかなか思うようにかけられないことは重々承知しているし、こちらにも自由にはかけられない。しばらくしてやっと電話の機会があった。

「あの話どうなったかな」

「工場のスタッフとも相談したんですけど、いや器械は簡単なんですよ、すぐ作れます。でもロール本のほうがねえ。だれが作るのかと。一冊あたりすごく高くなってしまっじやないですか」

やはりそうであったか。私もうすうす勘づいてはいたのである。しかしそれを言ってしまったら話が先へ進まないと思つて、考えないようにしていた。ほかのひとの頭脳ならまたなにかよい知恵が浮かぶかもしれないと期待をかけていたのである。やっぱりダメか。

という次第で、ロール本構想はあえなく潰（つい）え去つた。

そんな折り、知人から『明日を創る 頸髄損傷者の生活

の記録 』（上村数洋著、三輪書店、一九九〇年発行）を

送っていただいた。上村さんは自動車事故で頸損になったものの、持ち前の行動力とアイデアを駆使して、福祉機器の開発と普及を説いてまわっているひとである。

中にページめくり機の章があった。

全身麻痺というきわめて特異な状況に置かれた者は、ほかの頸損の情報が入ってきにくいせいもあって、自分だけがまったく独自の体験をしていると思いきみがちだが、案外みんな同じような経路をたどるものである。考えてみれば、一日の行動にしても、健常者が数百の選択肢を持つとすれば、頸

損には数種を選択肢しかないわけだから、似かよった人生を送ることになるのは当然のなりゆきなのである。

上村さんもまたページめくりに悩み、さまざま方法や器械を試したあげく、どれもいまひとつ満足できず、なかばあきらめたという。

《仕方なく、妻に一ページずつ洗濯バサミで止めてもらい、読み終わると呼んで次のページを止めてもらいました。最初の内は、良かったのですが、度重なると妻も仕事ができず文句は出るし、呼んでも来てくれなくなり、イライラは増すばかりでした。》

かくあって独自のページめくり機を考案する。著書にはそ

の詳細なイラストが掲載されている。しかし、どういう仕組みなのか、見てもよく分からない。要するにページのあいだに透明な下敷きをはさんで置いて、それをマウススティックでひっくりかえしてゆくものようだ。

私には合わないと思った。第一に、これを作ってくれるよ
うなひとが身近にいない。第二に、上村さんは、このページ
めくり機で一日に三、四十ページ読めるようになったという
ことだが、三、四十ページではとてもものたりない。一度セ
ットしてもらったら、肉体の限界がくるまで読まなければ気
がすまない。

同じ頸損とはいえ、ひとりひとり残存機能も異なれば、お
かれた条件も異なる。座位はとれるか、腕はどの程度うごく
のか。あるいは介護者は若いが高齢か、家屋の構造はどうな

っているか。ひとりとして同じひとはいない。みな同じような事柄に困るものだが、解決法は微妙に異なる。

重度障害者が行動を起こすうえでとりわけ重要なのは、なにに興味があるかである。とにかく願わなければ何も始まらない。そしてその願いが比較的簡単に実現しそうな見通しがあること、これも肝要なことである。

私は自力で本が読みたかった。心おきなく読みたかった。この方法では満足できぬ。わざわざ作ってもらった必要もなく、三百ページだろうが四百ページだろうが、その気になれば一日で読めてしまうような工夫はないものだろうか。

私は、こうしてみた。

文房具屋へ行って、金属製の書見台を買ってきた（そういうモノがあることを知っているかどうかで、そのさきの道が

ちがってくる）。

本の位置を顔の高さに近づけるため、書見台を適当な箱の上にガムテープで固定した。これで書見台は完成。

本をひらいて表紙を書見台の背もたれにクリップなどで固定する。書見台の下部にはもとからページ押さえがついているので、本が閉じてしまう気づかいはない。ただ、金属製の書見台は、左右のページ押さえが連動していて不便だった。左右の厚さは、本の中央を除いて常に異なるのだから（左右のページ押さえが独立して動かせるプラスチック製のものを、一九九五年夏に発見した）。

これを一ページずつマウススティックでめくっていくわけだが、このマウススティック、それにスティック置きこそが、肝腎要なのである。



文頭にすこしふれたマウススティックは、鉛筆ホルダーとマウスピースとのつなぎめが、じきにこわれてしまった。お箸の先端に付けたゴムの摩擦でめくる方式だから、すこし力がある。それに、開きの悪い本のノドを押しさえついたりもしなければならぬ。

保健所の訪問OTに作りなおしてもらった。オストロンという材料でマウスピースをこしらえ、それに直径5ミリほどの金属パイプを

埋め込み、先端にゴムチューブを付けた。オストロンはもともと歯科医のつかうもので、安全かつ頑丈である。

ただ、どんな材料で作っても同じことだろうが、使用後よく洗っておかないと、くさくなる。マスクを長時間はめていたときにこもるあの悪臭である。人間の息や唾というものは、案外くさいものだということをあらためて知った。ディープキスをするときは覚悟しなければいけない。

マウスピースは、きちんと歯にそってかみしめるわけではないから、歯型をとる必要はないと思う。歯型のような形をしていればよい。なるべく薄いものがくわえやすい。

私ははじめからくわえる部分が歯型マウスピースだったからいいようなものの、上村さんのばあいは、入院中に病院のOTが作ってくれたマウススティックが棒状のものだった

たせい、か、歯型に行き着くまでに十年ほどかかった。その詳細が、「第八回リハ工学カンファレンス一九九三」に「マウス・スティックについて」と題して報告されている。

一本棒タイプのものを長年つかっていたら歯ならびが悪くなってしまうたという。受傷当時と現在の歯型の写真を掲載している。実証精神が好ましい。

さらにおどろくべきは、昔より鼻の穴が大きくなったといつて、受傷前・受傷後の顔写真をくらべ、頸損仲間に同様の現象がないかどうかアンケートをとったうえで、マウスステイック使用と鼻の穴拡大との因果関係を証明しようとしていることである。

さもありませんと笑ってしまった。頸損はただでさえ肺活量がすくなくて息苦しいのに、座位をとると起立性低血圧で脳

貧血気味になる。そこへさらにマウススティックをくわえて口がふさがれるものだから、酸素不足をおぎなおうとして、知らず知らずのうちに鼻の穴がひろがるのだらう。障害者ならではの観察である。医者は、そんなことなど目もくれない。そういえば思い出したことがある。受傷後数カ月たったころ、どうも目がおかしいと気付いた。奥目になってしまった。主治医に訴えたが、相手にされなかった。それでなにか都合が生じないかぎり取り合わないというのが、医者の習性のようである。

私の数すくない観察例によれば、頸髄損傷者は、たいてい上まぶたがくぼんでいる。天井を向いて寝ている時間が長いので、眼球が奥へ沈んでゆくのではあるまいか。あるいは、体を起こしているときには目をひらくために無意識のうち

に上まぶたの筋肉をきたえているのが、臥床生活になると目をみひらく時間が短くなって、上まぶたの筋肉が衰えるのかもしれない。

それはさておき、奇しくも年を同じくして「OTジャーナル」にマウススティックに関する論文が掲載された（吉森洋子・内山幸久共同執筆、三輪書店、一九九三年十月発行）。

吉森さんはOT、内山さんは頸損で(有)ネットワーク・コンソーシアム代表取締役。それによるとマウススティックは、薄くて軽量、かつ咬合（こうごう）部位が広いほど、顎関節、歯、歯周組織への影響が少ない。形状は歯列弓に沿った半円形がよく、前歯でかむ方式は、歯列不正などの症状を生じやすいとある。

この事実が、もっと以前に、より多くのマウススティック

使用者に知られていれば良かったのだが。

さて、マウススティックと書見台だけでは、いくらページがめくれても完成とはいえない。くわえっぱなしというわけにはいかないのである。めくるときだけくわえ、あとは離しておける、そしてまた簡単にくわえられる、そういうものでなければ究極のページめくりと豪語する資格はない。

内山さんが使っているもので、私には合わないが興味深いと思ったのは、マウススティック・スタンドである。論文の写真を見ると、書見台の横に空き缶を置き、マウススティックをさしている。缶を板にとめる方法がおもしろい。「ワンカップ大関」のふたを木ネジで板にとめておき、上下のふたを切り抜いて筒状にした「カゴメ野菜ジュース缶」をはめるのである。銘柄を指定してあるのがうれしい。実用的である。

スティックを立てるやりかたは、以前ためしたことがあるが、私にはできなかつた。たぶん内山さんほど車椅子の背もたれを起こせないせいだろう

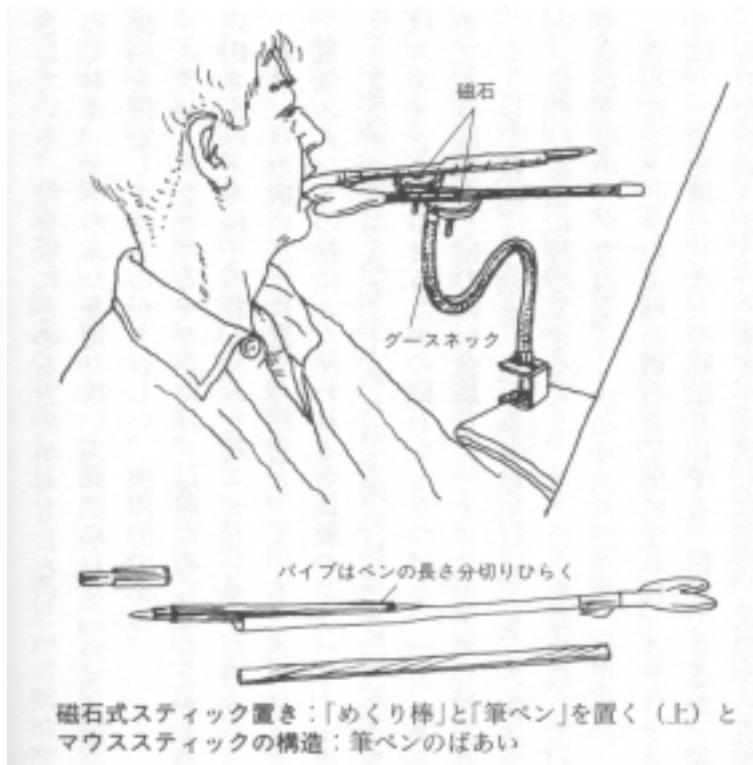
私は、口の横に水平に置く方法をとっている。スティック置きの構造は、こうである。

電気スタンドの軸によく使われる金属製のジャバラ

専門家は「グースネック」と呼ぶ。gooseneck 雁首である

あれの下端に机などに固定するためのネジをとりつける。上端にはスティックをのせるための磁石をとりつける。一方、あらかじめスティックの全長には、パイプとほぼ同じ幅の薄い金属をビニールテープでしっかり付けておく。

こうしておけば、ジャバラが多少かたむいても、スティックはピツタリ磁石に付いて落ちない。姿勢の変化に対応でき



るよう、ジャバラを長めにして、まさにガチョウの首のよう
にまげてつかうのがロジである。

さらにジャバラの上端の磁石を二個にすれば、スティック
は二本置ける。一つをページめくり、一つを筆ペンなどの

筆記具にする。何が

できるか、説明する

までもあるまい。

この磁石式ステ

ィック置きが完成

したのは、退院から

五年を経たやはり

一九九三年のこと

である。これもまた

保健所のOTとPTに作ってもらった（訪問OTや訪問PTが絶対に必要であることを強調しておきたい。自分が動けない以上、まわりに動いてもらうしかないのである）。

だが、おそらく、私がいかに豪語しようとして、べつのひとが見れば、この方法は自分には合わないと思うことだろう。

数年前にテレビで星野富弘さんの近況が放送された。チン・コントロール（顎操作）式の電動車椅子で道を行くとき、太陽が背後にくるようなばあいには、車椅子の向きを逆にしてバックで運転すると暖かいと言っておられた。これはいい、と共感した。野外の空気にふれる機会のすくない者にとって、つめたい風が顔にあたるのは、ひどくつらいことなのである。むかしは自転車でビュンビュン寒風を切りながら走るのが、

一種の快感でもあった。なのに、いまはちょっとでも冷たい風が顔にあたると、すぐさま帰りたくなってしまふ。

絵を描く場面で、私はおどろいた。彼が字や絵にとりくみはじめたころとまったく同じ姿勢だったからである。処女作『愛、深き淵より。』（立風書房、一九八一年第一刷発行、八年第七十二刷発行）の写真によれば、ベッド上で右側臥位になり、ベッドの柵に付けたスケッチブックに向かって、口で描いている。それが、十年以上たったいまもなお同じスタイルなのである。

側臥位では、テレビも見づらい。画面を九十度横転させたいほどである。まして精緻な画風で、立っている対象を横になつたまま縦に描くとは。すわった姿勢で対象に向かったほうが見やすいのではないかと思うのだが、ご本人にしてみれば

ば昔からやりつけた方法が最善なのだろう。

かかえた問題は同じでも、解決法は、ひとそれぞれ。いくら自分がよいと思っても、それが究極の方法とは言い得ない。だが、多様性の中にもなにかしら普遍的なもの、もっとも合理的な要素があるのではないか。そんな思いがあるからこそ、私は私のおっている方法をひとに伝えたいのである。

（以上）

『五秒間ほどの青空』テキストファイルご注文の方には、全イラストを添付します。